

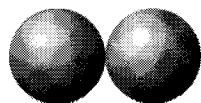
NiCHE

音 龕

19

vol.

工学院大学建築学科 同窓会誌 1995

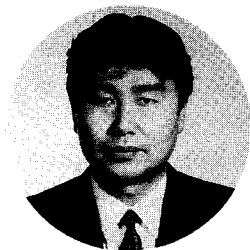


龕 [がん] 1. 仏像を納める厨子。 2. 棺 (ひつぎ) — 広辞苑
ニッチ [Niche] (独 Nische) 龕 (がん) とも書かれる。壁体内に掘られ、
多く平面半円、半円筒状で、上に1/4半球をいただく凹所。彫像など
を置く。 — 共立・建築辞典

niche (nich), n. {Fr. niche, from L. nidus a nest} 1. a recess
or hollow in a wall usually intended for a statue, bust or
vase. 2. a place or position particularly suitable for the per-
son or thing in it. — Webster's New Twentieth Century
Dictionary.

『NICHE』vol.19 発刊によせて

工学院大学建築学科同窓会会長
高本雅行 (1982年修士課程修了)



建築学科同窓会の皆様には、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

初めて取り組ませていただきました同窓会の役員として早いもので3年がすぎました。私自身は微力ながら引き続き会長を務めさせていただくことになり、本会のさらなる発展のため新たな気持ちで、新役員の皆様と全力で務めさせていただきます。

このニッチが皆様のお手元に届く本年5月ごろには、1973年に計画の端を発した新宿再開関係事業も22年の歳月を経て、工学院大学新宿テクノキャンパスとして完成いたします。利用できる施設としてましては、大学棟の28階に卒業生の皆様が自由に立ち寄れる校友会談話室が校友会の事務局の隣にあり、卒業生の方の名簿や校友会の会報、飲み物等も用意されております。ここは現在さまざまな部会、ミーティング等にどんどん利用されております。また中層棟にはバーカウンターも用意されたファカルティークラブもございます。このスペースは内装も落ち着いた雰囲気のため、研究室ごとの同窓会やパーティにたくさん利用されております。こうした器とともに大学院公開講座や生涯学習センター公開講座など社会で活躍する卒業生も参加できる講座も新設されました。このように皆さんが大学をご利用できる機会が続々と整ってまいります。卒業生の皆様も新宿においでの際には母校にぜひお立ち寄りください。

昨年10月29・30日には神戸で、工学院大学校友会全国大会が行われました。建築学科同窓会としては関西新空港旅客ターミナルビル、ライトの設計による山むら邸の見学会も行いました。しかし、美しい神戸の街の印象と楽しい思いでも冷め止めぬ1月17日、神戸周辺を襲った大地震と火災により、阪神地区は壊滅的な被害を被りました。大会の際には会の運営や見学会の当日にも様々にお世話になった阪神地区の卒業生の

皆様も多大な被害を受けられました。最も被害に遭われた校友会兵庫県支部へ建築学科同窓会としては100万円、校友会全体として、1,000万円の災害義援金を校友会を通じてお送りする予定です。また、建築学科の先生方をはじめ大学院生の皆様の地震の被害の緊急調査に対して調査、研究費として300万円の援助をさせていただきました。

調査に行かれた建築学科の廣澤先生、宮澤先生をはじめとした先生のご活躍をテレビ、新聞等でたびたびご覧になった方も多かったと思います。

今回のニッチにはその調査・研究報告の一部を寄せていただきました。十分なページをご用意できなく残念な思いですが、ここでご紹介できない部分については、あらためて特別講演会として6月にはその研究の成果を発表していただく機会をご用意させていただく予定です。その際には、ぜひ卒業生だけではなくご友人の方もお誘いのうえおいでください。



新宿校舎中層棟の「ファカルティークラブ」。

建築学科の近況

工学院大学建築学科教授
山下 司



1995年は阪神大震災、東京地下鉄毒ガス事件、そして異常な円高など、特に世紀末的現象が次々と起こり暗いニュースが続いています。そして相変わらずの景気低迷の中、卒業生の皆様はいかがお過ごしでしょうか。元気で頑張っておられることと思っております。1995年度の建築学科主任は私と廣澤先生、幹事は沢岡先生と遠藤先生のスタッフで執行部をあずかることになりました。3月20日に卒業式があり、1部建築学科、建築学コース178名、都市建築デザインコース72名、2部建築学科62名、大学院34名の卒業生が新しく皆様の仲間入りをするようになりました。特に今年はデザインコースにとっては第1回の卒業生であり、そして再開発期間中募集停止をしていた第2部建築学科の再開発後初の卒業生であり、例年になくたいへんにぎやかな卒業式でした。ここ数年恒例になった京王プラザホテルでの卒業式、そして大学院の学位授与式、続いての卒業祝賀会は2,000人近くの立食パーティで、暗い世相を吹き飛ばす熱気にあふれ、卒業の喜びに満ちていました。1995年度の建築学科は新入生1部約290名、2部約90名で、大学院が約50名の新1年を迎えます。それに対しわれわれ教員スタッフは教授15名、助教授11名、講師7名、助手2名の計35名で教育・研究に励んでいます。これに加え客員教授2名、特別専任教授1名、兼任講師59名の総勢97名の多数の教師陣によって学生ひとりひとりにきめ細かい教育を行っています。学生数も多いが、それにもまして教員数が多く、全国私大の中でも教師ひとり当たりの学生数をもっとも少ない大学のひとつです。それだけ充実した丁寧な教育をやっているということになるでしょう。このようなことが産業界に認められ、不況の中でも100%の就職率を可能としていることだと思います。今年度から新しく専任となられる3人の方方を紹介します。特別専任として都市計画担当の石田頼房先生は、都市計画史でたいへん著名な方で都立大学で長年教授を務めておられた方

です。さらに都市計画部門を充実するため、東京大学から若手の専任講師として野澤康先生が着任されます。また考選系では早稲田大学から振動が専門の久田嘉章先生が専任講師としてわれわれ専任スタッフに協力して下さることになり、より充実した教授陣となります。本学建築学科創設以来40年間にわたって教育・研究に務めてこられた十代田昭二教授が1995年3月31日付をもってご退任になりました。先生は本学科創設以来一途に建築学科の発展のため尽力してこられました。3回の主任教授をはじめ、デザインコース創設、構造系の要として、また熱心な教育者として本学に寄与された功績はまことに甚大なものでした。卒業生の皆さんとともに先生に感謝し、これからまた自由に輝かしい人生を送っていただきたいと願っています。本年度より5人の専任スタッフが昇格されました。望月大介先生、初田亨先生が教授に、大橋、大塚、遠藤各先生が助教授としてますます教育・研究に励んでいただけのことと思います。

1994年度の卒業設計は1月31日に提出され、特にデザインコース初の卒業制作でたいへん期待しておりました。なかなか期待通りにはなりません。初の卒業制作としては及第点でしょうか。同窓会の皆さんから援助をいただいて、コンペ応募も例年より活気をつけてきました。学会コンペ全国佳作入選1点、支部入選2点、その他各種コンペ入選13点、また沢岡先生が仙台近代文学館、歴史博物館と続けて佳作入選で今後期待したいと思います。

本学出身の設計指導の兼任講師として、本年度から新しく尾関勝之、船越康弘、永嶋弘児の方々に参加願うことになり、計12名のOBに後輩の面倒を見てもらっています。

平成7年度の卒業生の就職もすでに動き出していますが、あいかわらずの景気低迷で困難が予想されます。OBの皆さん方の協力を、主任としてぜひお願いしたいと思っております。昨年暮にセキスイハウスの太田さんらを中心に約100人の同社の本学OB会を、新宿校舎28階会議室で開催し、本学からの新入社員10名を含め賑やかなパーティでした。これからこのような各社のOB会を開き、現役との交流を図っていただきたいと思っています。本学は交通至便で情報の中心地でもあり、28階会議室、ファカルティクラブなど施設も充実しております。皆さんの利用をお待ちしております。

最後になりましたが、本学新宿再開発も最終段階となり、北東部の地下および広場が5月に完成予定です。これも新宿キャンパスにふさわしいコンセプトを具現したものと期待していましたが、どうもはずれそうです。

終わりに皆様のますますのご発展とご健康を祈って、建築学科より近況をお知らせいたしました。

都市建築デザインコース 都市デザイン専攻

工学院大学建築学科教授
中嶋 泰



建築学科同窓会の皆様には、お元気でご活躍のことと拝察いたしております。都市建築デザインコースも発足して4年を経過し、平成7年3月には最初の卒業生を送り出すことができました。

都市系のスタッフを誌上でご紹介いたしますと、中嶋泰教授、渡辺定夫教授（平成6年4月東京大学より就任）、小嶋勝朗講師、平成7年4月からは都立大学から石田頼房氏が特別専任教授として、また東京大学から野澤康氏が講師としてそれぞれ就任されます。兼任講師には東京都の古川講師がおられます。都市系大学院生は修士1年6名、修士2年6名、研究生1名が在籍しています。昨年の大学院生が、第8回建築環境デザインコンペティション（1994）「コミュニティ銭湯」に応募し、岩田義弘、関剛、正田ひろみ（中嶋研）提案の「ホットラインHOT-LINE」が学生賞となり、萩原研も学生賞、南迫研は佳作となり、3点の入選を見ることができました。

1月17日（火）の阪神・淡路大震災は特記されるニュースとしてわが国の災害史上最大級のものといえましょう。特に都市型直下地震としては前例がなく、その被害の規模、内容は皆様ご承知の通りです。都市と災害、都市と建築、まちづくりなど、多くの教訓をわれわれに痛感させたことは誌上で語れるものではありません。建築学科の先生がた、構造系をはじめ各系の方々も現地入りされ、ご活躍されました。学生たちはボランティア活動として、都市建築デザインコース3年長田君が中心となり、全学各学科の学生たち有志による現地入り（神戸市中央区）は、第1次～第5次（1週間単位）を実施しました。このことは奉仕と体験を積む時間としてこの時期をもてたことは、建築を学ぶうえで二度とない貴重な事態に直面した年といえましょう。また、校友会、建築学科同窓会からのご協力で災害地調査など、資金面でのお世話によって、小嶋

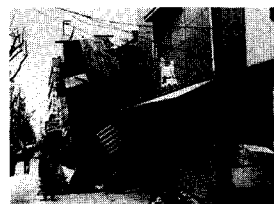
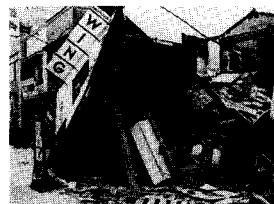
研では大学院生を伴って現地入りを行い、市街地の被災地状況踏査を通じての調査・考察を実施しました。

思えば昨年初、工学院大学校友会兵庫大会開催に参加したおり、神戸の市街地・港湾など昼と夜の街で見た姿が脳底に強く残っております。神戸の姿を見る最後の機会となった神戸大会は、終生忘れることのできない思い出であり、これからのまちづくりに対する新たな思考への道標を与えてくれた感もありますが、貴重な事態として見つめ、私なりの勉強の糧にしたいと思っています。一日も早く、被災地の方々が安心できる復興計画の実現を願ってやまないものです。私事ですが、若いころ西宮仁川・岡本に親がいたので、三ノ宮などは特に思い出深いところであります。

また学生たちの就職などについても、工学部の特質から、昨年は就職難の時代といわれているにもかかわらず、比較的良好で、全体的には昨年同様と考えられることであり、OBの方々のご協力を今後ともよろしくお願ひしたいと願っております。

新宿再開発事業も5月には完成する予定で、広場地下1階には丸善、地下2階にはアサヒビーカーラーなどの飲食店もできるので、ビールで喉を潤すことができそうです。大学の前には地下鉄13号線の駅工事が進行中で、近い将来地下鉄環状線として新宿にまた新しいターミナルが誕生するなど、大学周辺も変転しておりますので、新宿校舎はじめ八王子校舎にもぜひお立ち寄り下さい。

（掲載の写真は、都市系大学院生が現地で撮影した神戸市内の被害状況の一部です）。



都市建築デザインコース 建築デザイン専攻

工学院大学建築学科教授
望月大介



1991年に新入生を迎えた新コースも、本年3月第1回生を送ることとなりました。これまで「建築学コースとの相違は何か」との質問に対して、この4年間を通してひとつの方向が定着し始めたと思います。試行錯誤を通して「都市建築デザイン」を中心とするデザイン教育であり、従来の建築学コースに比較して技術系科目が少なく、設計科目が多いのがカリキュラム構成の特徴です。この4年間の教育を通しての矛盾も生じ、その反省を踏まえて1995年より新コース・カリキュラムの一部改訂を行いました。基本的デザイン教育の方向は変わりありません。

カリキュラム構成の一部改訂について

従来の建築学科教育を中心に設計（デザイン）に重心を置きスタートいたしました。学修上の問題が少し出てきました。ひとつには入学者のデザインへの関心度と個々の能力のバラツキであります。もうひとつはデザインさえできれば、その他の科目に関心をもたない学生の増加であります。入学時には軽い気持ちでデザインコースを専攻した学生が、専攻科目の増加に伴い、学修内容に対応できにくい学生、あるいは勉強意欲のない者がです。また、建築全般にわたる知識量が乏しく、デザインのための狭い範囲の学修にとどまってしまうことなどが浮き彫りにされ、これらへの対応策が学科カリキュラム委員会を中心に検討されました。今回のカリキュラム改訂の主な点は、1・2年次における「建築学」と「デザイン」両コースの共通科目の増設により、コース間の区分を減少させています。この背景には、学生の専攻選択の幅を拡大し、各自の学修しやすいものに近づけるためであります。また、デザインコースの技術系科目と基礎設計科目をはじめとする設計科目を1・2年次においては「建築学コース」と共通に設置しました。

3年次専攻科目と卒業制作について

3年次の建築専攻については建築デザイン1～3を通して、その設計課題もセミナーハウス、美術館、都市環境施設、公共複合施設など多様です。学生作品も1・2年次で即戦力が養われ、3年次では個人の能力差が生まれ、デザイン教育の効果が上がってきたことは確かです。ただ図面の表現力や設計能力が伸ばされたものの設計課題を通して、物事を深く観察し分析する姿勢については、必ずしも十分とはいえず、特に構造や設備への問題意識の希薄さを指摘する教員もあり、これらも改善すべきものと思われまます。

本年度初の卒業制作がされ、その採点結果からは相対的に建築学コースに比べて落伍者が少なく、作品内容も全体としてよかったことは、デザイン系教員としてホッとしています。また従来の卒業論文については、デザインコースも単に作品のみでは教育上の偏りを生じる配慮から、各研究室のテーマに沿った論文を提出させています。むろん研究室により卒業制作の前段階としての対象建築についての調査、分析、企画、規模設定などさまざまですが、基本的には論文+作品=卒業制作の形式です。

今後の課題と就職について

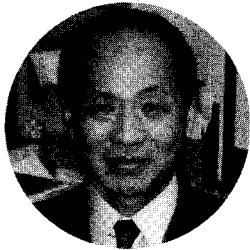
建築専攻の今後の課題は、技術系科目の充実と多様な学生の個性をどのように引き出し、伸ばすべきかであり、同時に建築全般の知識量の拡大にあります。建築という樹木を中心に都市的問題を含めたオールラウンドな教育が必要と思われまます。また一方、学生の就職についても今日のような経済状況下では、教室としても積極的に取り組むべき課題であります。今後、先輩諸兄のこれら就職へのご理解とご協力をお願いいたします。

新コース発足5年目を迎え、'95カリキュラムとともに今後より充実した教育が必要と考えまます。

最後に卒業生の皆様のますますのご活躍と母校へのご支援をお願い申し上げます。

建築学コース 計画系

工学院大学建築学科教授
荻原正三



1991年から建築学科に都市建築デザインコースが生まれ、その関連として以前からの建築学科は建築学コースとなり、その中が4つの専攻に分かれて4年が過ぎた。

この4年間で振り返ってみると、4つの専攻のうちの計画系を選んだ学生数は毎年コース全体の約半数にのぼり、系の各研究室ゼミには毎年10数名が入っている。

計画専攻の学生が多く入る研究室は、山崎研究室(日本建築史) 初田研究室(近代建築史)、荻原研究室(公共建築計画)、宮城研究室(医療福祉施設計画)、安原研究室(住宅計画・CADシステム)、東研究室(地域・土地制度論)、木村研究室(空間・規模計画)、廣部研究室(建築空間論)の各研究室で、研究室によっては建築学コースの学生とデザインコースの学生の両方を引き受けているところもある。

計画専攻の卒業研究はAタイプ(卒論+卒計)かBタイプ(卒論のみ)の選択で、卒業設計作品は今年初めて卒業生を送り出したデザインコースの卒業制作作品と比べても遜色なく、優秀賞(銅賞、平成6年度は最優秀・銀賞の該当者はなし)の数も同数(両コースとも5人)、建築学会卒計展作品展、JIA・画翠レモン・近代建築誌による卒計展作品展なども両コースで分けあうかたちとなった。

卒業生の就職先は、昨今の社会情勢の影響を受け、年々厳しさが強まる傾向がみられ、大手企業が減少気味で中小企業にまで広く拡散する結果となっている。特に設計事務所関係の落ち込みが激しく、また女子は従来の住宅産業の受け入れが減少するなどいっそう厳しい結果となった。

平成7年度からカリキュラムが新しくなり、デザインコースの建築技術関係科目の拡充を図るとともに、両コース間のコース変更をやすくした。

平成6年度は新宿再開発の関係で5年間ほど募集中断した後、再出発した2部(夜間)が久しぶりに卒業生を送り出した。再

出発に際し重点を置いた社会人の学士入学(2年・再教育)が立地のよさも手伝ってか軌道に乗り、設計事務所・企業在職中の学生が増え授業に活気が出てきている。

2000年には現行の臨時定員増が元に戻るのに、大学のリストラは急務となってきた。デザインコースは早い機会に学科昇格を検討せざるを得ない状況である。

建築学コース 構造系

工学院大学建築学科教授
望月洵



人事について

十代田教授が退任され、久田嘉章さんが新しく講師として来任、また大塚さんが助教授に昇格します。十代田さんは1955年以来40年間にわたって力学を担当され、卒業生の皆さんには苦楽ませこぜの思いがあるかと... 後は音楽三昧の生活とか。久田さんは地震波の伝播について研究されている30代の方で、本学の構造分野で欠けていたところを埋め、おおいに期待されています。



上：十代田先生とご夫人

下：昭和38年、明神ガ岳にて。十代田先生36歳の時。左より3人目が十代田先生。

阪神大震災

1月の阪神大震災は、耐震工学の成果を自負していた構造関係者に未知の問題がいっぱいあったことをまざまざと教えてくれました。日頃の講義も、半分が間違いとまではいわないまでも当を得ないものだったようで、恥じ入っています。「人の話は眉にツバをつけて聞け」、もっと上品に言えば「真理は常に書き換えられる」は、まさしく真理と実感しています。もっとも、これを天の与えてくれた教訓または試練と考えなければ、亡くなった方や家を失った方々に申し訳ありません。広澤さんや宮澤さんがRC造や木構造の被害調査に活躍されています。小生もこれを機に破壊制御の実験をやりたいと考えています。

学生と就職

地震の頻発で構造を選ぶ学生が二の足を踏むかと思いましたが、このところ構造系の大学院生と学生は増え、立つ瀬が広がった感じです。昨年の就職も7月に皆決まりました。しかし、頭が高いといわれた3年前に比べるとぐっと格落ちの感は免れません。卒業生もリストラの風にさらされているかと思いますが、今年もよろしくお願いします。

雑

久しぶりに、卒業設計(都市建築デザインコース)の採点に参加。日頃、畏敬の念で見ていたわりにはあまり上手くない作品が目立ちました。力仕事もだめでは先行き不安です。一般的に「教師が、先輩が範を垂れると学生もよくなる」というのは7割がた真理です。もっともこれは研究についてもいえ、天に向かってツバを吐くような言葉です。自省の意も含めています。

建築学コース 環境設備系

工学院大学建築学科教授
足立哲夫



環境設備系の専任スタッフは昨年と同じく中島研究室、水野研究室、宇田川研究室、演習室や計測準備室が新宿校舎24階北半分に(残りは電気系)、足立研究室、大橋研究室、それに各研究室の実験室が八王子校舎に配置されています。

学生実験、卒論、修論および各研究室の研究に関する実験のほとんどはいま八王子校舎11号館、9号館音響実験棟(電子科と共用)、それに室名を聞いて懐かしがる人もいられるプレハブ校舎B-2においても実験の一部が行われています。音響以外の実験室、特に各研究室共通の実験部門に関しては高信先生が中心となって管理運営されています。また専属の学生職員がひとり配置されていますが、実験準備と補助以外にも演習科目の資料作成などのアシストも行っています。

演習科目、2部講義、演習科目には本学出身者を含む兼任教員との供担、分担が多く3・4年生が実社会の空気に接することができるような考慮がされています。

ここ2年、環境設備コースを選ぶ学生を30名強でやや少なめですが今年度のカリキュラム編成に当たっては都市建築デザインコースを含む全学生が環境設備系に親しみやすいように科目配列などを考慮しています。環境設備関連企業については求人状況は幸い順調ですが一方それだけに系の教員に課せられる責任の重さを感じます。また大学院への進学志望者もかなりおり、他大学の大学院に進学する者もおります。

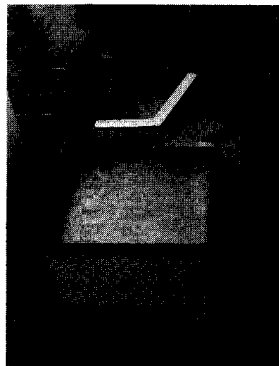
卒業論文のテーマの多くは担当教員の研究対象とオーバーラップしていて毎年それ自体興味があります。1994年度の環境設備系の卒業論文の数は20数点で、そのうちBタイプはちょうど20と例年よりやや少なめでした。主観的ながらテーマをおおまかに分類しますと、およそ次のようになります。1)設備の性能評価法、2)運転状態や負荷等の実態解析、3)エネルギーの応用に関する研究、4)特性や性能の解析に関する基礎的研究、5)住環境、設備システムに関するシミュレーション、

もちろんこの分類のふたつかそれ以上にわたるものも少ないのですが、いずれも環境設備分野における多様な領域のかなりの部分にわたっていると思われます。そのうちには数年にわたって継続するもの、新しい観点から見直すもの、あるいはまったく初めての主題などありますが毎年着実に進んでいるように思えます。

また電算機を専門としている宇田川研究室以外の各研究室に数第のパソコンが卒論に限らず日常的に使われ、研究室は工面して購入せずにいられなくなったのも最近目立つところで、これは環境設備系に限りませんが、今年度より建築額コースでは情報処理に関する科目が必修となり、環境設備系でも電算機はさらに重い位置を占めると予想されます。

いうまでもなく、環境設備系は快適な居住環境をいかに合理的、経済的に創造するかの教育・研究を行っているわけで、研究室ごとに取り組むテーマは異なっているけれども皆この目的のもとに活動しております。

下の写真は八王子校舎音響実験棟の9号館、5号館より見る。上のふたつの不整形の室は残響室。下の正方形平面は無響室。



建築学コース 生産系

工学院大学建築学科教授
吉田倬郎



早いもので今泉先生が退職されてもう1年以上もたってしまいました。先生も今も社団法人建築研究振興協会会長としてご活躍です。現役の生産系のスタッフは難波、吉田、遠藤の3名です。

難波先生は、平成5・6年度の2年間、建築学科の主任教授として学科運営に当たられました。教室運営や大学全体に関わることなど、主任教授は多忙な役職ですが、特に平成6年度は人事関係の仕事が例年になく多かったようでした。一方では、永年続けておられるポリマー混入の厚塗りセメントモルタルの研究やワーカビリティ試験装置の開発などにも精力的に取り組まれています。また海外での研究発表も熱心に行われています。

遠藤先生は、京都大学の助手を辞されて本学に赴任されてから早2年になります。平成6年度は卒論生も多くなり、また学会活動などにも積極的に参画されています。研究テーマについては、プロジェクトマネジメントに関する国際比較、建築コストに関する調査研究、PC構法の生産性、東南アジアの住宅研究など幅広くこなされています。海外にもたびたび足を伸ばし行動力にあふれる研究スタイルで新しい分野を開拓されている様子は、本当に新しい風を呼んでいるといえます。平成7年度からは、建築学科の幹事として学科運営についてご活躍されることとなります。

私は、木造住宅の生産供給、住宅リフォーム、耐用設計法、評価、工業化構法などの卒論とも関連づけた研究を、具体的な題材は変わってきていますが継続してやっています。一方では地球環境と建築の問題に関する研究や、ガラス工事や建具工事のJASSの改訂、あるいは各種の部品開発や認定制度のお手伝いなどを構法計画の立場からさせていただく機会が次第に増えつつあります。もう少し整理しなければと思いつながり、現実はなかなかそうはいかないという状況です。大学で

はただ今カリキュラムの改訂や自己評価運営などのお手伝いをしています。

学生諸君との関わりについては、系全体としてのイベントを従来と同様に積極的に行っています。専攻セミナーや卒業研究の説明会、卒業研究の中間発表会、そして発表会は、生産系として合同でやっています。このうち卒業研究の本発表会は他系でも合同でやっていますが、その他は生産系独自のものです。本学建築学科の中でもっとも世帯の小さい生産系ならではのまとまりのよさだといえましょう。こうしたことを通して、生産系の卒論生は研究室相互の交流を深めることにもなり、卒業後の人間関係を豊かにすることにも役立っているものと思われます。そうはいっても生産系が小世帯であることは、一方で社会のご要望に十分応えられるだけの卒業生を出せないという問題にもつながっており、関係各方面、特にOBの方々のご支援をいただき、生産系の充実への展望を図る必要があることも重要な課題と考えています。

大学院生の充実も最近の生産系の特色です。平成6年4月時点では、難波研究室はM2が4名、M1が1名、吉田研究室はM1が2名でした。この平成7年4月時点では、難波研究室はD1が1名、M2が2名、M1が2名、吉田研究室はM2が1名、M1が2名、そして遠藤研究室はM1が2名ということで、総勢10名です。生産系では早く社会に出たいタイプの学生諸君が多いこともあり、大学院に残ってさらに研鑽を積もうという諸君は少なかったのですが、ここ1・2年の大学院生の増加は生産系にとっても学科全体からみてもおおいに好ましいことだといえます。建築物のつくられ方が多様化し、従来の設計と施工という二分法では建築生産の的確な捉え方が困難になる中で、建築生産のプロセス、設計および施工をはじめとするさまざまな職能、社会や環境との関わりを総合的に捉えること、そしてその適切な処理が重要な課題となっていますが、こうした中で本学に限らず建築生産分野の役割が注目されていることの反映だとも考えられます。建築生産分野の研究テーマを見ても、そういう動向がさまざまに反映され、それに関心をもつ学生が増えてきたものと思われます。建築生産分野の人材に対する社会の需要に本学としても十分に応えられるよう、なお努力しなければと気を引き締めています。

大学院建築学専攻

工学院大学建築学科教授／運営委員
获原正三

昨年に引き続き、大学院建築学専攻の近況をお知らせします。

入学生数

修士課程は平成5年度35名、平成6年度50名、平成7年度46名とほぼ毎年50名の水準で推移している。平成7年度は博士後期課程4名入学予定。

また、入学生のうち本学出身者以外の人数は平成5年度から1人・6人・4人で、そのうちの外国からの留学生は平成6年1名(フィリピン)、平成7年1名(中国)。

コンペ入賞者

建築学会競技設計全国入選をはじめ平成5・6年度の入選件数は20件を越える勢いで活況を呈している。そのうち、平成5年度建築学会全国入選の石川直人(2年)と平成6年度大塚篤(1年)の両君の作品は平成6年度工学院大学大学院生優秀論文として表彰を受けた。また、北川正仁君(1年)のように飛騨高山学生家具デザイン大賞(銅賞)ほか4つのコンペに連続して入選したつわものも現われている。

武藤章賞

故武藤章名誉教授を記念して修士論文(作品)計画設計部門の最優秀者に贈られる武藤章賞(金賞)は本年度、牛山宗隆：大規模公共施設とその周辺環境のあり方——第二国立劇場周辺における建築的展開——と、長谷川昌之：東京の空間考現学——ケーススタディ・電腦化の拠点としての秋葉原——のそれぞれユニークな作品を提出した両君に決定した。

修士定員増

平成7年度から建築学専攻の1年次募集定員は現行の20人が40人と倍増が認められた。

社会人入学

同じく、平成7年度から社会人入学制度が認可され、昼夜開講制により社会人が企業などに勤務しながら勉学に励み、修士または博士の称号を取得できる制度を今後積極的に推進することとなった。これに伴い10月にも入学できるシステムを設けた。建築学専攻でもこの新制度をおおいに活用していきたい。同窓生の皆さんにも、この新制度を活用して高度の専門知識・能力をもって技術者としての修士・博士の称号に挑戦されることをお勧めしたい。平成7年度のこの制度による初の入学生は、博士課程3名である。

阪神大震災の調査を通して学ぶこと

工学院大学建築学科

広澤雅也 建築学科教授

宮澤健二 建築学科助教授

小嶋勝朗 建築学科講師



阪神大震災義援金、現地調査援助金について

建築学科同窓会は、兵庫県・神戸支部への義援金として100万円、建築学科の先生の現地調査援助費として300万円を支出しました。

神戸での全国大会でお世話になった兵庫県支部の方々も、今回の災害で現在わかっているだけで6名の方が被害にあわれました。自宅のマンションが倒れかけた方、事務所や店舗が倒壊した方などいらっしゃいましたか、幸いにも亡くなられた方はありませんでした。同窓会としては100万円を校友会の義援金の一部として、兵庫県・神戸支部へ送らせていたさしました。

この未曾有の大地震は、図らずも建築構造を中心として、安全性・計画の基準を再確認する絶好の機会となってしまいました。我が建築学科では、特に構造系研究室で「新耐震構造基準」をつくられた廣澤雅也教授、「金融公庫基準に関する木構造の研究」の宮澤健二助教授らを中心に、解体撤去される前にしっかりと現地調査に取りかか

るようになりました。一刻も早く社会にその結果を報告することが大学の使命でもあり、その評価につながる考えたからです。しかし、年度末でもあり、そのわずかな予算の工面にも、突然のことで大学および建築学科では十分に対応できない状態でした。

大混乱の現地に入り、宿泊や食事のめども立たないまま、多数の大学院生たちとともに調査を開始することは、並大抵のことではありません。したがって建築学科同窓会としまして、自由に調査研究費として使っていたたくへく、この調査援助費を出すことを緊急決定いたしました。

学科内での話し合いの結果、各系に300万円を次のように配分いたしました。

構造系：195万円 計画、生産、環境設備系：各35万円

これらの成果は、すでにマスコミなどで一部紹介されており、お気付きの方も多数いらっしゃると思います。

大量かつ激甚な地震被害

広沢雅也 (建築学科教授)

現地調査の第一印象——あまりにも大量かつ激甚な建築物の地震被害に呆然としたこと

現在はマスメディアの発達が非常に著しく、外国に起こった地震でもすぐその日のうちに座りながらにして多くの被害を目のあたりにすることができるが、多くの場合、テレビ報道では被害の激しい部分のみが強調されすぎるくらいがあった。しかしながら今回の阪神大震災による被害は、過去20数回見えてきた国内外の被害とは異なり、現地の被害のほうがはるかに著しく、まさに圧倒された感が強い。

このような圧倒されるほどの被害激甚な地域は気象庁による震度7の地域などに限定され、これを少しはずれると様子はガラッと変わり、被害は相当に少なくなる。とはいっても、被害の激甚な範囲が南北方向に約1km程度でありながら東西方向には30kmほどに及んでいることが、被害状況の著しさをいっそう強くしていると思われる。

いずれにしても、このように狭い範囲内で著しい被害程度の違いがみられたことが、今回の地震被害の大きな特徴といえることができる。

大勢の犠牲者をもたらした多数の木造住宅の倒壊

過去1.2年の間に、釧路沖地震(1993.1)、北海道南西沖地震(1993.7)、三陸はるか沖地震(1994.12)と立て続けに起こった大地震でも振動による倒壊例が少なかった木造建物の耐震安全性については、日本の他の構造による建物と比較して遜色はないとされてきた。

これに対し、この地震では膨大な数の木造住宅が倒壊し、5,000人を越える犠牲者の大半の原因となったが、前述の激甚な被害地域以外でも広い範囲にわたり著しく傾いた建物や防水のための青いシートで屋根を覆った被害建物が数知れず認められた。この著しい被害の違いは、主として次のような諸条件の違いによるものであることは、次第に定量的にも明らかにされてくるものと思われる。すなわち今回の倒壊住宅については、壁量が相当に少ないこと、しかも壁倍率の小さい木摺壁であること、屋根が重いうえに腐食の進んだ建物が多いこと、さらに接合金物がほとんど用いられていないことなどである。本学の宮澤先生も明らかにされているように、上記のような問題点のない例として、住宅金融公庫による新しい融資住宅やいわゆるプレハブ住宅などの被害は対照的にほとんどなかったとされている。

RC、SおよびSRC造中層建物の被害原因

これらの建物についても被害例は非常に多いが、著しい被害地域内でも無被害建物は少なくない。その原因としては上記の地域(による地震入力)差のほか、建設時期による構造性能の差(1971年以前の建物のフープ不足)、1981年以前の建物の不整形な建物形状(1階を駐車場としたピロティ付建物や街角に建つ偏心壁配置の建物)などが指摘できる。こうしたことから、1981年以降のいわゆる新耐震による建物は全般的に被害がかなり少ないが、それでもピロティ付建物や平面形状が複雑な建物の中には、倒壊した例をはじめ顕著な被害を生じた例がみられ、耐震設計の不十分さがうかがわれる。さらには鉄骨造建物の溶接やRC建物のガス圧接などの現場接合の施工不良の例、および計量鉄骨の腐食の例などが少なくない。

新しいタイプの被害と今後の課題

芦屋浜の中層住宅での鉄骨の脆性破断、RC系中層建物での中間階の層崩壊に代表される新しいタイプの地震被害や、今後、報告が増えると思われる杭の損傷、RC系の柱・梁接合部の剪断破壊や柱・梁の付着割裂破壊などについての研究の推進、設計法の改善は今後の重要な課題となろう。

以上のように、阪神大震災では現行設計法では不適格となる建物の被害が大半を占めたことになり、今後、既存建物対策の推進が必要と思われるが、病院などの建物については用途係数の採用による耐震規定の部分的強化も重要な検討事項になるものと思われる。



被害の少ないRC造中層建物のかわらで倒壊した木造住宅の一群

阪神大震災 被害の概要

宮澤健二 (建築学科助教授)

ロサンゼルス'92.6.28, インドネシア'92.12.12, 釧路沖'93.1.15, 北海道南西沖'93.7.12, ノースリッジ'94.2.17, 北海道東方沖'94.10.5, 三陸はるか沖'94.12.29, 兵庫県南部地震'95.1.17. 建築学会の耐震連絡小委員会に木質構造の代表として出席してからの主な地震である。地震発生以来今まで、災害調査に関わる毎日である。ここ数年木質構造の耐震性の研究が主で、幸い大勢の学生スタッフがいる。3月24日現在、5回の現地調査を行った。大学として、建設省の「木造住宅等震災調査委員会」や建築学会の木質構造運営委員会としての活動である。本格的な研究はこれからであるが、概要を報告する。

1. 地震動について

過去に経験したことがない大きな地震動で、鉛直動も大。多くの地盤や建物の地震動記録が得られた。

2. 地震発生時刻と避難

午前5時46分→まだ暗い(被害の可能性低い時間)
揺れが大きく立てない→火を消すことができず、今後問題
火災、細い道、住宅密集地→道路・防災計画の問題

3. 建物の地震動による被害と配慮すべき問題

ほとんどの構造物(特に古い住宅)が被害にあった
圧死者が多く出た→新耐震の精神に反する。
地震動の大きさと合わせて考える→安全性とコスト
一般建築物の新しい破壊形式と今回の特徴
中高層建物の中間階での破壊、鉄筋コンクリート構造
の接合部破壊、鋼構造物の脆性的破壊・溶接欠陥

4. 住宅関係(少し詳細に述べれば)

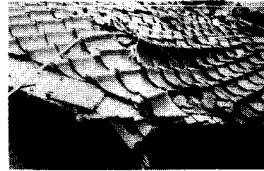
老朽化、古い規準、重い土葺き屋根瓦の住宅、文化住宅、筋
かい無しか少ない、ミニ開発、構造計画悪いものに被害が多
いが、最近の住宅でも次のような被害があった。

構造計画が悪いもの、狭小間口の住宅に被害あり。
柱脚や筋かい端部の耐力不足によるもの
施工不良によるもの
構造設計に起因するもの

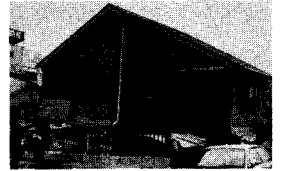
しかしながら、

公庫融資等設計施工管理しっかりしているもの被害小。
3階建は被害小(小屋裏利用3階建被害少し目立つ)。
プレハブ、枠組壁工法等は被害少ない。

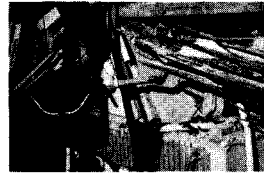
5. 今後の問題点(住宅に関して)



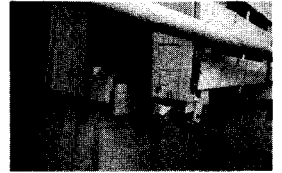
写-1



写-2



写-3



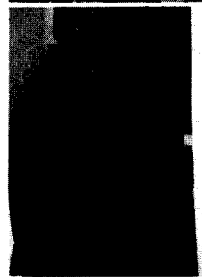
写-4



写-5



写-6



写-7

写-1 重い土葺き屋根の住宅
写-2 構造計画の悪い2ヶ月の家
玄関側の壁量全く不足、筋かい端部耐力不足
写-3 アンカーボルト不適切
アンカーボルトがあるが2本柱の左柱直下、
土台も落下
写-4 工事中の3階建
車庫のため道路側壁不足、柱脚部・筋かい
接合部耐力不足(それでも50日後工事再開)
写-5 中間階の破壊
写-6 鋼構造溶接不良(宮澤)
写-7 鋼構造高層建物の破壊補修前後(S64
院望月卒・小野里君、宮澤)

住宅の耐震性能の明確化(特に大地震に対して)建築設
計・生産・品質管理体制の強化(住宅以外でも)
基準法・施行令改正の可能性は?

仕様(構造計画+構造規定)と性能(構造計算)を明
確に
耐力壁つりあいよく→明確化(仕様または性能規定)
が必要
壁率(必要壁量)→建物重量化して再検討必要
だが、そう大きな変更ないと思われる。
柱脚、筋かい端部→強度とねばり、仕様明確化必要
耐震診断、耐震補強の必要性

謝辞: 活動費援助と卒業生の御協力に感謝申し上げます。

阪神大震災踏査報告

小嶋勝朗 (工学院大学建築学科講師)

はじめに

1995.1.17阪神・淡路大震災で犠牲になられた方々に心からのお悔やみを申し上げます。また、被害を受けた方々には心からお見舞い申し上げます。

今回の調査は、以下の調査実施概要に示す通り、平成7年2月9・10・11日の3日間にわたり大学院生・研究生・卒研生と私の計8名で行いました。なお、交通費等の調査費用について校友会・建築学科同窓会・建築学科から補助をいただきました。ここに厚くお礼申し上げる次第であります。

調査実施概要

A. 調査目的：都市計画の中嶋泰研究室と小嶋研究室が合同で、大震災後の主に歩道部分を中心とする歩行者スペースが、どのような状況また役割を果たしているのか、また都市整備上特に問題があり、また見落とされていると思われる点の抽出をすべく踏査のうえ考察することとする。

B. 調査日時：平成7年2月9・10・11日(3日間)

大震災発生後、約25日を経過しているため、復旧状況を併せ考察することができる。

C. 調査参加員：8名

小嶋勝朗

岩田義弘・黒田夏樹・関剛・高橋秀樹(大学院M1)

山田和徳(研究生)

山本貴雅・早船智彦(卒研生)

D. 調査範囲と調査内容：調査期間の関係もあり、特に倒壊・火災のひどかった地域を中心に徒歩で踏査のうえ写真撮影を行った。また必要に応じ簡易測定等も行っている。とにかく被害範囲が非常に広地域にわたっており、その中を線的に踏査しての調査であるため、必ずしも全体像を捉えているとはいえない(図1「踏査ルート・鉄道と道路の主な被害」参照)。踏査ルートは歩行者利用の多い歩道部をもつ街路が調査の中心となったため、駅前・商店街・幹線街路部分が主に観察されることとなった。具体的調査範囲は被害が特に大きかったJR兵庫駅周辺から神戸電鉄有馬線長田駅周辺までを西端とし、東端はJR西宮駅から阪急神戸線西宮北口駅周辺までのJR東海道線を軸に阪急電鉄神戸線と阪神電鉄本線に挟まれた範囲である。

E. 徒歩による踏査距離：1日間の調査とはいえ、1日目・3日目は東京との往復時間が含まれていること。神戸市内に宿泊

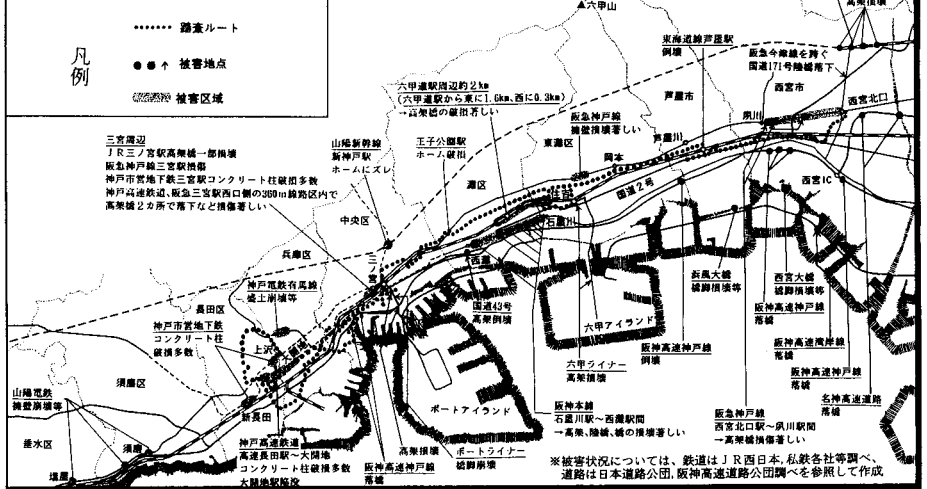
地を探すことが困難なため、大阪市内との往復に振替バスや宝塚・三田経由の阪急神戸線で長田に出るという迂回ルートを使わざるを得なかったことから、1日目約11km、2日目約19km、3日目約15kmで、3日間合計で約45kmぐらいが踏査されたことになる。写真撮影や計測等を行いながら、危険を避けての踏査距離はほとんど限界に近いものであったと思っている。なお参加員が日毎たくましくなっていくのが頼もしく見えた。

F. 踏査時における注意事項：被災状況を調査検討し今後の街づくりに生かそうとの今回の現地調査も、地元被災民からすれば、何の手助けもすることなくただ写真等を撮りまくる一種の「被災地観光客」にすぎない。よって服装など地元の方々のもとの異質が目立つものとならないよう注意した。現に新聞などにも、地元の方々が着の身着のままで生活している空間に、ヘルメット姿で危険な場所を冒険でも楽しんでいるかのような服装をして歩いたり、被災地をバックにVサインをするなど心ない行動は地元民に多くのひんしゅくをかけたことが取り上げられていた。また今回の調査目的に直接関係のない被災民の顔やテント生活等、被災民の望まない撮影等もしないよう注意することとした。

地震内容と震災発生時間帯の違いで被災状況はまったく違ったものとなる。過去の被災経験を安直に総括したり自信を持つてはならない。

地震の起きた1月17日(火)は、15日が成人の日であったが、日曜と重なったため、16日(月)が振替休日となり、二連休がまさに終わろうとしている時に発生した。夜更かしの私は自宅でテレビをかけた状態の中で、リアルタイムでこの状態を知った。東京でも震度1の微震であったそうであるが、まったく感じられなかった。午前5時46分ごろ、揺れは20~30秒ぐらい続いたようである。この日の日出時間は7時06分。空が白々と明け行く中に高速道路や高架の鉄道が大きく崩れた状態が驚くほど静かにテレビのフレームの中に映し出されていた。私はこの1月17日に記憶があった。やはり二連休後の昨年の同月同日、日付変更線を挟むものの、ロサンゼルスを中心とする米カリフォルニア州一帯でM6.6規模の地震があり50件以上の火災や道路破壊、停電等で都市機能が麻痺、死者51人、負傷者約5,400人の被害を呈していたのである。当時、サンフェルナンドバレーの高速道路の落下状況等がテレビに映

踏査ルート・鉄道と道路の主な被害



し出され、わが国のいわゆる地震防災の専門家たちが、地震に対する無防備さをかなり手厳しく指摘し、地震国日本ではこのようなことはまずあり得ないといった自信を語っていたのが記憶に残っていた(今回の解説時にはっきりと、この時の見通しは甘かったと素直に自分の非を認め、謝った方は極めて少なかったように思われた。と同時にしたり顔での解説、東京でなくてよかったといった不用意な発言がかえって視聴者のひんしゆくをかい、番組によってはこの種の専門家による解説はこの切迫した時期にやるべきではなかった、適切ではなかったとの苦悩をあらわにしていた方もいた)。

テレビに映し出される被災状況は、復旧にかなりの時間がかかるであろうとは思ったが、文献や写真等の記録で知る関東大震災のような状況とは、あまりに隔たりがあり必要以上に静かなものであった。そう感じられた大きなファクターとして地震発生時刻が上げられる。つまり、早朝、日の出前の5時46分は、高速道や電車にも移動中の自動車や乗客が極めて少なく、歩道にも通行人が見られなかったからである。死者やケガ人はそのほとんどが住居内に限られていたのである。もしこれがラッシュの時間帯であったなら、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図が現出し関東大震災にも匹敵する死傷者が出ていたかもしれないと思った。

今回、調査目的とした街路等の歩行者空間は、ラッシュ時の通勤時間帯を想定して考えてみた場合、大きな被害が想定されることから何らかの対策がぜひとも考えられなければならない重要な整備課題を抱えたエリアなのである。

さて、その日の夜、自宅に帰ってテレビに映し出された被災地の様相はまったく異なっていた。神戸の市街地一面が燃え上がる火災と黒煙に覆われつくし、それを呆然として眺める被災者と、ほとんど手の施しようがなく水の使えない消防士の姿であった。つまり地震発生時に降に起きた火災が被害をより大きなものとしていったのである(電気の回復による漏電

が主なる原因と考えられたが放火の噂もかなりの真実味もっていたといわれる。また放水用の水が豊富にあったなら火災による被害ももっと少なかったはずであった。しばらくしてからは海水の利用などが実施されたが、自営団でも豊富に利用できる水源の確保がもっと真面目に考えられていたらと悔やまれてならない)。

被災時より、被災後の対応が極めて不満足な状態であったことが問題であり、この点については、多少の違いはあるかもしれないが日本全国何処でも似たような状況にあるとって過言ではあるまい。今後早急な対応が考えられなければならない重要な都市整備上の問題であると認識した。そして死者・負傷者数は、情報が正確化するにしたがい増加していき、4,500人近い死者数を数えるに至った。そして未曾有な大震災として認識されることになったのである。

歩道部分の被害パターンの分類と解説(主に広幅員街路の歩道部分を対象とする)

被災後23日目にしてわれわれは現地入りした。1日目はJR住吉駅まで行き、ここから先は不通のため、振替バスで三宮駅前へと向かった。列車やバスの窓から見るのとはまた違った様相を呈していた。クラックだけでほとんど見た目に無傷な建物もあれば、外見はそれほどでもないがよく見るとかなりの被害を受けている建物、まったく原形を留めることがないほどに倒壊してしまった建物等が入り交じっており、建物の建築年数、構造の違い、工法材料の違い等で単純に総括することが困難であることが想像できた。路面のひび割れ状態などからみても、非常に狭いエリアごとに、つまり隣り合う家でも地震の力のかかり具合に差があったことが予想され、今回規模の地震に耐えるような建物をつくることはそう簡単なものとは考えられなかった(建築物・建造物自体の耐震性等については、建築構造を専門とされる方々が研究されるであら



1



3



2



4

歩道部分自体の崩壊例

1. 隆起して歩けなくなっている道路（神戸市役所裏）
2. 中央部が陥没した（神戸電鉄長田駅近く）
3. 歩道緑石のコロビ（JR住吉駅前）
4. 公園内にも地割れが（夙川沿いの公園にて）
5. 自然発生的に形づくられた歩道空間（ゴミ置き場と通行空間が市街地のだ真ん中になんとも人間味ある空間を生み出している（JR青木駅付近）



5

うし、建築材料や施工等の問題点についても同様な対処がされているので、われわれはこれ以上の検討は避ける。現実問題として、今回程度の倒壊が今後の震災においても起こり得るという状況判断を前提としてまとめていくこととしたい。一歩裏道に入ると、まったく歩行不可能な道路があちこちに見られた。そのような所はほとんどといってよほど放置されていた。また今回、写真で紹介するルートも多くは広幅員街路の歩道部分で、歩行者の利用も多いことから、被災直後とはかなり違っているものと思ったが、それでも歩道を完全に塞いでしまっているところも数多く認められた。

歩道部分の被災パターンは、4つに大別することができ、これが単独または複合して被害を形成しているといえる。以下簡単な説明をする。

A. 沿道施設は歩道側に倒れたりしていないが窓ガラスの落下・タイル等仕上材の剥離、落下・構造材の一部落下・看板クーラーの落下等。（今回は歩行者がほとんどいなかったため大きく取上げられることがなかったが、被害も大きくなる可能性がある。しかし対策も立てやすいものである。）

- 1) 窓ガラスの落下：今回も事務所建築等に多く見られた。第一段階として歩行者の多い歩道に面する2または3階以上の窓ガラスは網入りガラスの使用を徹底することが特に望まれる。1～2階部分でもできるだけ網入りガラスまたは飛散防止シートを張ることが望ましいが、店舗のショーウィンドー利用等を考えると見栄えが良くかつ飛び散らないガラスやこれにかわる材料の開発が望まれる。
- 2) タイル等仕上げ材の剥離落下：ガラスも落下することで、死傷事故にも結び付くわけであるが、ビルの仕上げ材等の落下も自重があるだけに直撃されれば大きな事故となる。地震破壊による落下のないような仕上げ材および工法が望まれる。
- 3) 構造材の一部落下：特に今回のようなひどい震災にあ

っては、柱、梁等も破壊され路上に飛び散った。頻繁に起きるものではないが、このような壊れ方もあることを考えての対策が必要である。

4) 看板・クーラー等の落下：一番心配していたのであるが、思ったほどには被害がなかった。今回のような揺れ方の場合看板だけが落下したり、看板の亚克力板の破壊などは極めて少なかったように思う。無論、看板・シェードの落下がなかったわけではないが、この場合は取付け部分を含む建物本体が倒壊しているように見受けられた。クーラーの場合、地盤面やそれに近い位置にあるものが倒れていたのが見受けられたが、クーラーだけが落下したものはほとんど見受けられなかった。ただし、このような場合、すでに片付けられているとも考えられるので確かな判断はできない。

B. 歩道自身の被災および歩道上のファニチャー等の倒壊等。

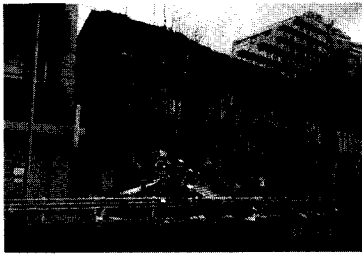
- 1) 歩道の亀裂等：場所によって亀裂の大きさ・方向は千差万別。その結果、縁石が車道側に倒れ込んだり、隆起または陥没が起きている。特に敷地境界部に被害が集中して見られた。液状化による汚泥の吹出し、地下埋設物のガス・水道管の破損による吹出しもあった。
- 2) 街灯、電柱等の倒れ込み：ガードレール・標識・街路樹等も倒れ込みが見られたが、自重によるのではなくB-1に付随して起きているものがほとんどであったように見えた。また電線の切断垂れ下りは危険が多い。
- 3) アーケード・バス停の被害：火災に問題ありとするアーケードは、今回注目の施設のひとつであったが、三宮センター街の倒壊以外、かなり老朽化しているものでも倒壊は極めて少なく、両側の店舗が倒壊していても残っていた。それ以外で被害を受けたアーケード・バス停には、屋根材のホコが燃えたものがあった。
- 4) 路駐車両・フラワーポット等の倒れ込み・移動：直接



6



8



7



9

沿道施設の歩道への倒れ込み例

6. 建物が完全に倒壊し歩道を塞いでいる このような例は極めて多い(神戸市内)
7. ガケ地擁壁の倒壊 このような状態では歩道は怖くて歩けない(神戸電鉄長田駅近く)
8. 構造材の1階柱が座屈 建物の倒壊は免れたもののどのような勢いでコンクリが弾け飛んだのだろうか(三宮駅前近く)
9. 沿道商店のシャッターボックスの落下 建物に大きな被害がないのに、取付部が腐っていたのがこの手の落下物は珍しい(長田商店街)

人命を奪うことは少ないであろうが、逃げ道を塞ぐなど問題は多い。

C. 沿道施設の歩道への倒れ込み等。

- 1) 建物：上部からの倒れ込み，下部がずれ出したもの，階の途中が座屈して飛び出したもの，1階が座屈し2階が飛び出したもの等が見られた。
- 2) 塀・擁壁・花壇：以前から指摘されているようにブロック塀・万年塀の倒壊，その他自重のあるものに危険性を感じられた。ただし，生け垣を防災面から進めるものもあるが，敷地規模の狭いわが国の場合，防犯面等を考えると一概には推奨できないものがある。
- 3) 自販機・置看板等：倒れ込みはかなりあったようであるが，人力で移動可能なこともあり，直接下敷きにならない限り大きな問題とはいいい難い。ただし設置に当たっては土台部分を強固にするなど適切な対策が欲しい。

D. 車道側から車両などの飛び込み等。

走行中の車両が運転不能状態になり歩道部に飛び込むものが危険ではあるが，これ以外にも駐車中している車両がずれ込む等の危険である。

震災復興都市計画のあり方について

鷹取商店街周辺の一面の焼け野原の中に亡くなられた方々に手向けられた花が痛々しく咲いており，その脇には区画整理事業の小さな看板が数枚ぶら下げられていた。住民が着の身着のまま，やっとのことに命ひとつで避難所や親戚・知人宅と避難先もはっきりしない時に，つまり住民の意見が一番聞けない状況を待っていたかのような都市計画事業の告示は「火事場泥棒・弱いもの苛め・行政の横暴」といった言葉があまりにもびったりとするものであった。早々に事業決定に持ち込み，話し合いと称して決定済事業を盾に住民の意向を無視して事業を進める。これは今までのいわば常套手段であっ

た。横浜・神戸は市レベルにおける都市計画先進地として知られて来た所である。その神戸市の対応は衆目の注視するところであった。そこで行われたことはどのようなことだったのか。誰が見ても震災復興事業による街づくりは早いに越したことはない。たしかに今回のように住民の弱みに付け込んだ事業は進めやすいものであろう。しかし，長期化し死傷者まで出し続けた成田空港問題等の「ボタンの掛け違い」による行政不信をより広く全国に知らしめる結果となった。どんなに形だけ綺麗な街をつくっても，そこには本当の街が生まれはしない。行政は被災者に対して，相変わらず校庭のテントや体育館に間仕切りひとつない状況で，まるで家畜のような生活を強い続け，ボランティアに任せっぱなしで何ら抜本的対策を立てていない。仮設住宅づくりもこれまでの居住地から遠く離れており，老人を隔離するように送り込まれている。このような被災民の生活を顧みない施策は，せっかく震災時に逃げ延びた人たちが避難生活の中でストレスを高まらせ，徐々にではあるが死亡者となって増え続けていっている。われわれは建築や都市づくりに際し，いつの間にか写真や図面や地図に表現できるものを「都市・街」と思ってしまっはいいのだろうか。街とは人びとの生活あつての街ではないか。まずは住民の生活を救済し，自立を促し，自力更生の活力を与え，見通しがたつて，初めて住民と対等な話し合いを持つての理想的街づくりができるのではないか。どんなに雑誌等に綺麗な街の写真が並べられても地元を愛し続ける住民の生活を忘れ，切り捨ててしまつてどこに「真実の美しさ」があるのか？ 個人的にはあるが，今回の大震災を総括すれば優しさのないところ，思いやりのないところに本当の街づくりは生まれてはこない。形だけの外形だけの美しさはいかに空しいものか。それを全国民の深層に植え込んだだけだったのではないか。そんな思いを残して被災地を後にした。

同窓生を訪ねて 佐藤淳一氏に聞く



さとう・じゅんいち

1964年 工学院大学建築学科卒業 東京都庁に入庁
 1964～1976年 多摩ニュータウン（首都整備局）、江東防災拠点再開発（首都整備局）、杉並清掃工場（清掃局）の計画策定に従事
 1976～1983年 江戸川区の建築行政（江戸川区建築主事）
 1983～1986年 建築物の耐震診断、建築施工の指導（首都整備局）、建築材料の検査、JICAでメキシコ地震派遣
 1986～1989年 学校営繕（教育庁）
 1989～1992年 東京都建築行政（東京都建築主事、都市計画局）
 1992～1994年 新都市建設公社で八王子、福生などの再開発
 1994年～ 現在、東京都多摩西部建築指導事務所所長（建築行政、開発行政）

本日はお忙しいところ、時間を割いていただきありがとうございます。同窓会も新体制になって3年目となりまして、できるだけ柔軟な行動をしていると考えています。今日は行政側の立場から面白いお話しがおうかがいできればと思います。

● 面白い話がいっぱいあればいいんですが、絞り出さないと（笑い）。こういうような機会でもないと、自分の本籍が工学院だということを忘れてしまいますね（笑い）。

個人のカ グループのカ

行政の分野では工学院出身者はどのくらい活躍されているのでしょうか。

● 意外と多いんですよ、工学院出身者は。しかも優秀な人が多い。ただ、他大学に比べて横のつながりが希薄なんですよ。東大とか早稲田は横のつながりが強いですよ。歴史では工学院も負けてはいないのですが、グループとしての力が弱い。彼らは社会の中でグループの力をもっています。ですからまとまって何かをしようというのがしやすいでしょう。工学院出身者は、建築の世界では数は多くても、その他の理系・文系をふくめた社会の中では少数派ですから、たいしたこともできないのではないかとというのが先にたってしまうようです。都庁の建築関係でいえば、都と区では管理職クラスに工学院出身者が10人ほどいるんです。部長クラスに私を含めて5人、課長クラスに5人ですか。東京都の建築行政では工学院はすごい勢力といえるでしょう。ですからぜひ横のつながりをつくっていかうというんですが、なかなか...

同窓会運営委員会では名簿の編集もやるのですが、実際に編集作業を進めておきますと、建設省はじめ都や県にたくさんOBの方がいらっしゃるのに気がきます。うまくそういう方たちとコミュニケーションをとって情報交換ができるようになれば、工学院の力も強くなるのと思います。

● 一般職を含めますともすごい数になります。そういえば最近私学から建築の公務員になる人たちは減っているようです。偏差値が上がっているのかな（笑い）。やはり東大、東北大は多いですよ。あとは早稲田くらいですかね。建築では大学卒業者は年間12～3人しか取りませんから。女性がその中の2～3割を占めています。最近はそのほうが元気がいいですよ。面接をしても元気がいいですよ。

私の勤務する設計事務所でも女性は頑張っていますよ。強いです（笑い）。

● 現在、東京都では女性管理職は少ないです。もっとも管理職になるためにはある程度の年齢が必要ですからね。現在管理職についている人たちが大学生だったころは女性の学生数も少なかったし公務員になる女性も多くありませんでしたから。それに建築行政は女性に向かないといわれていましたから。しかし、これからはどんどん増えていくでしょう。現在は一般職も含めて2割が女性です。

早稲田出身の友人に聞きますと、その友人は公務員に同窓生がいないという

んですよ。

● 早稲田は公務員に進む人があまりいませんね。土木は多いようですが、建築は少ない。早稲田に入ろうとする人はデザインを志望する人が多いのではないですか。学校自体に公務員へ進むという雰囲気がないようですよ。校風が在野精神に富んだ校風ですからね。東大の場合は、建築をやりたくて入るというのではなく、入ったときはどこへ振り分けられるのか分からないのですから、建築へ進むことになってつまらなかったというのであれば公務員になるしかないんですよ（笑）。彼らは公務員の中で勢力をもってますしね。都道府県はこのところ東大以外の人たちが増えていますが、国レベルでは圧倒的に東大が勢力をもっていますから。この役所に入れば上から大学の先輩が引っぱってくれるという状況があるわけです。工学院の場合、勢力があるとはいっても、まだそこまではいいません。ただ、公務員と同じ学校の出身者が多くいるということが学生に知られてくれば、状況はどんどん変わっていくでしょうね。もっともわれわれもみんなにPRするわけでもありませんから、公務員に工学院出身者が多いというのはあまり知られていないんです。

同窓生がどこにいるかということも、ちゃんとご存じなんですよ。

● 名簿をつくったんです。まだ全員で集まったことはありませんが。名簿といいましても、自然に分かった人たちを集めただけです。調べればもっといるかもしれませんが。同窓生名簿をみれば役所勤めの人拾い出せるんですが、異動した方たちが多く、現在の居場所が分からないんですよ。

同窓会名簿の記載事項の変更届をしっかりと出していただくように、この場で宣伝しておかなくてははいけませんね（笑）。

数年前から都市建築デザインコースができ、特に都市デザイン専攻では、どうしても都市行政、建築行政と結び付いていかななくてはなりません。そういった意味からもネットワークづくりをしっかりとやっていかななくてはならないと思うのですが。

● われわれも、そういう面にどんどん協力していきたいと考えています。いくら新しい学科をつくっても、社会での受け皿がしっかりしていなくては意味がなくなってしまいますから。都市デザインなどは、まさに行政とつながっていかなくてははいけませんよ。

最近では都庁に入るの難しいといわれているようですが、やっていることはまさに学校で習ったことしかやらないんですよ。社会常識があれば、都庁なんて受かるんですよ（笑）。勉強が好きならですが（笑）。東大出身者たちは、頭がいいんですよ。一緒にやっているとよく分かります。いやになるほど頭がいい。だから少しぐらい頑張らなくては彼らと渡り合っていけませんよ。日本中の大学生で公務員を目指して頑張ろうという人たちはそんなに多くないんです。たまたま公務員になるような人間のほうが多いのではないですか。です

からちょっと頑張れば公務員には簡単になれるはずですよ。競争率の高い地域は「ちょっと」というわけにはいかないでしょうが。

学生時代・卒論・就職

研究室はどちらだったんですか。

● 平岡先生の研究室でした。山下先生が講師になりたてで、その後足立先生が助手で入れられたころです。卒論は公害の研究でした。計画といえば計画なんですけど、公害が建物に及ぼす影響を調査・研究するのではなく、公害の測定ですからね。地域性と公害の程度の調査ですから、あえていえば都市計画に非常に近いものといえるかもしれません。自分の興味にはあっていましたが、公害がマスコミで大きく取り上げられる前のことでしたから、なかなか先見の明がありましたね（笑）。

公害という言葉が一般に浸透するのは1970年代に入ってからですね。

● そうです。平岡研究室はこの調査をずっとやっていたのですが、早くから公害についての問題意識をもっていたんですね。雨水といっしょに落ちてくる汚染物質の調査ですよ。当時はずいぶんと原始的なことをやっていました。ポンプで空気を吸い込ませて紙についた汚れを数えたり、雨水を集めてそれを沸かして汚染物質を抽出したりしてました（笑）。今ならフィルターでろ過させたりするのでしょうか。面白かったですよ。交番の屋根の上に乗らせてもらったり。渋谷のハチ公のところの交番です。大学生らしかったのはこの1年間ぐらいでしたね。仲間たちと都内を調査のためにずいぶんと動き回りました。卒業間近になって卒業設計を提出するとき、自分の分はなんとか終わったんですが、仲間のうちのひとりが間に合わないということで、みんなで手伝いました。名前は出さないでやってください（笑）。

いつの時代も同じですね。

● やはり今でもいますか（笑）。でも、みんなで手伝った



平岡研究室卒論生。1963年11月撮影。新宿校舎旧館屋上建築計画言論実験室前にて。左より持田光男氏（故人）、佐藤淳一氏、熊田武司氏、望月大介氏、三浦正昭氏、足立哲夫氏、栗林佳尚氏、木村幸弘氏。

その作品が一番よくできていたような気がしますよ。

学校に泊り込まれたの作業だったのですか。

● 屋上に計画原論の実験室がありまして、よくいえばベントハウスですが、そこに泊り込みました。当時山下先生がそこを管理していたおり、特別に泊り込めたわけです。平岡研究室はわりとまとまりがよかったですね。3年生までは学校に真面目に通ってくるだけの学生でしたがお金がなかったですね。家が近かったものですから、節約のために昼食をとり家に戻ったりしてました。お金がないので麻雀もやらず、建築の雑誌を買うのがやっとでした。部活動も部費が払えないからやってませんでした(笑い)。

印象に残っている先生は。

● 平岡先生には「本に書いてあることなんか覚えなくていいんだ」と教わりました。どこに書いてあるかを覚えればいいんだということなんです。これは今でも下の者にいうんですよ。社会に出て仕事をしていくうえで、こういう発想は大事だと思いますね。何でもかんでも記憶してしまうと、出来事に柔軟な対応ができなくなります。平岡先生に教わった、こういうバランス感覚は今でも大事にしています。

莫大な情報を頭にインプットするより、インデックスだけを入れておけばあらゆることに柔軟に対処できるということですね。

● 管理職試験では論文があるんです。3時間で2,000字くらいの論文試験です。もちろんその試験の際にテーマが与えられます。ところがテーマはだいたい予想がつくのでみんないろいろ覚えていくんです。みごと予想の中すれば問題ないのですが、ちょっとはずれただけで書けなくなってしまう。ところがインデックスをインプットしておいて後は柱立てを何本か用意しておけば、はずれても柱を1・2本入れ替えるだけで大丈夫なんです。平岡先生の言葉が社会に出て役に立っているんですよ。

公務員になろうというきっかけは何だったのですか。

● 同期で神奈川県庁に入った者と、あと特許庁に入った者がいます。公務員試験を受けたのも、彼らと「公務員試験でも受けるか」という気軽な感じで決まったんです。

公務員を目指して計画的に試験を受けられたのではないのですか。

● ええ。ただ大学に入ってから都市計画のほうへ進みたいという気持ちはもっていました。ではなぜ土木ではなく建築を選んだのかということになるんですが、学修ガイダンスをみてどちらも都市計画は2単位しかないんですよ。都市計画といえば土木だろうなと思って別の大学の土木学科を受けたのですが、それは落ちてしまいました。それで工学院の建築にも都市計画の授業があるというので受けたら、これは受か

った(笑い)。

当時は大学の中ですら「街づくり」という言葉がありませんでした。設計、計画といえばそれは単体の建物についてを指し、都市のことではありません。たしか同じ年か少し後に東大に都市工学科ができました。それ以降からですよ、「街づくり」とか「都市づくり」というものが浸透していったのは、そんな状況ですから、大学に入って都市計画を勉強しようとしても大庭先生の授業が2単位あるだけ。その講義も人口〇〇人に対して施設はこれくらい、といったもので都市計画の原単位みたいなものでした。

就職のときも、特にどこへ行きたいというのはなく、漠然とゼネコンの設計あたりを狙おうかなと考えていました。それで仲間の中で「公務員試験を受けないか」という話を持ち上がり、当初の目標である都市計画に比較的近いこともあって受けてみたんです。もちろん受けるときには遊び半分ではありませんでしたよ。受かるかどうかぜんぜん分からないのに、民間は1社も受けなかったんです。落ちたらどうしたんでしょうね(笑い)。就職の年は昭和39年、ちょうど東京オリンピックの追い込みのころですから、民間が人を多くとっていたんです。公務員になる人はたいへん少なかったです。とはいっても、面接試験のときに「都市計画をやりたい」といいましたら、「都市計画とは誰がつくるものなのか」と質問され答えにつまって「はあ?」というような状況でしたね(笑い)。とにかく「都市計画は建築や土木だけでなく、経済や社会の面からいろいろな人たちの協同によって行われるものです」といった覚えがあります。

都市計画に携わって 街づくりを考える

丹下さんが1960年に「東京計画1961」というプロジェクトを発表していますが、そういったものの影響や刺激というのはありましたか。

● ああいったSF的な発想はすごいけれど、現実にはできないだろうと思っていました。しかし、あれが悪いとかいいとかいう批判精神はなかったですね。今のように環境問題がトータルに議論されていませんでしたから、東京湾のど真ん中を埋め立ててしまうのがいいのかどうかはそれほど議論になっていなかったようです。都市計画をやる人間として「東京計画」のような提案を見ておかなくてはいけないという話はありませんでしたが、ああいったものをつくりたいと考えていた公務員はほとんどいなかったのではないのでしょうか。

都庁では多摩ニュータウンの計画が最初ですか。

● プロジェクト自体は入った年に動き出していたのですが、入って3年目にそちらに移りました。やっとなにもないところに絵が描けるといったところでしょうか。これからも遷都でもしないと、そうはない大規模なものでしたから、地元の行政とのすり合せが大変でした。あそこは4つの市が入っていますからね。絵を描くのはいいけれど、「都市計画」と一言でい

うほど楽なものではないと感じました。

ものすごく長いスパンなんですね。

● 本当は10年でできる予定だったんですよ、予算1,500億円
で10年。当時、新幹線が3,000億でできたんです。その半分です
ね。1年当たり150億で10年かけて30万人都市ができるとい
うわけです。ところが、あれから何年経ちますかね（笑い）。
本来街というのは時間をかけてつくるものでしょう。あれが
10年でできてしまっていたら大変ですよ。10年で完成しても、
そのころには再開発の時期になってしまう。時間がかかった
ために古いところと新しいところはまったく違うものができ
ています。街というのはそういうものではないですか。古い
ものと新しいものが混在しているのが街だと思えますよ。
多摩ニュータウンの開発当初は全面買収で、一気に造成をし
てつくりあげようとしていました。ところが買収のできない
ところが出てきてしまったんです。あそこは山と谷が入り組
んでいまして、谷には既存の集落があるわけです。道路も通
さなくては行けないし、しょうがないのでそこは区画整理で
いくことにしたんです。ですから買収でやるところ区画整
理でやるところが絡み合ってしまった。区画整理ですから、
できあがった後はももとの地主さんが好きなように使
います。整然と建ち並ぶニュータウンの間にゴチャゴチャッ
とした街ができてしまった。それがまたいいんですよ。隅か
ら隅まで人工的なものだと気持ちが悪い。区画整理はして道
はきれいに通っていますが、建てられたものには統一性があ
りませんから街並としては美しくはありません。ドロドロし
ています。しかしそこに人間味ができてよかったのではない
でしょうか。多摩ニュータウンは法律の主旨からいくと失
敗だったかもしれませんが、街づくりとしては成功したと考
えています。開発当初は「都市計画的に進めすぎて、呑み屋
はどうするんだ」などといっていました。ちゃんと区画整
理したほうに呑み屋ができていますよ（笑い）。

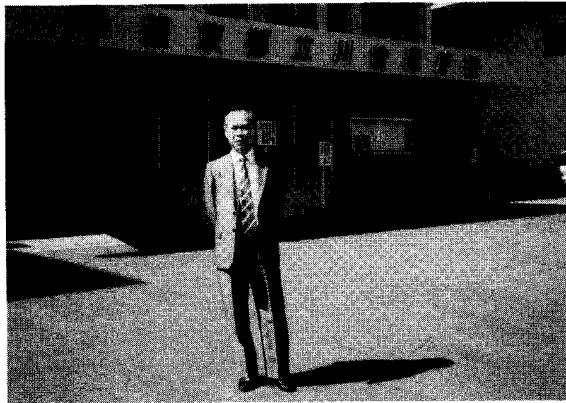
最近の臨海副都心の計画については、どのようにお考えですか。

● 法律的にはいいのですが、街としては魅力がないで
すね。ドロドロした部分がまったくありませんでしょう。地
盤はドロドロしていますが（笑い）。あれは街づくりのプロの
発想ではないですね。バブルにのっかった商業主義ですよ。

新宿校舎の周辺も再開発で超高層ビルが建ち並んでいますが、ちょっと離れ
るとドロドロした街がありますよね。

● 全部をきれいにするわけにもいかないでしょうし、再開
発エリアを広げてもどこかでそういう接点の部分はあるわけ
でしょう。パリのデファンス地区でも再開発地区の周縁部分
はひどいですからね。

建築基準法



現在、所長を務める東京都多摩西部建築指導事務所の入る東京都立川合同庁舎前にて。

実際に設計に携わっていると、さまざまな部分で行政庁に行って交渉しな
くはならないことがあります。建築士の資格は医者とか弁護士と同じ国家
試験ですよ。なぜ建築の場合は国家試験を通ったプロにもかかわらず行政
庁にチェックを受けなくては行けないのでしょうか。医者が診断を下す前に
厚生省にいった確認申請をだすことはありませんよね（笑い）。なぜ同じ
プロであるにもかかわらずこのような違いがあるのでしょうか。プロとしての
資格をとっているのですから、あえてもう一度チェックをする必要はないの
ではありませんか。

● われわれの間でもよく議論になる点です。少しずつです
が、その方向に進んでいます。たとえば木造住宅は、確認は
必要ですが書類はつけなくてもいいわけです。しかし、私に
設計ができないのと同じように、建築士の中には試験は通っ
ても法律のことはよく分からない人もいます。ですから
そこは分かる人がチェックをしなくては行けません。ただし
単体規定をいつまでも制度でチェックしていかなくてはなら
ないかという、それは議論のあるところ。医者の場合
は、ミスがあればその医者が責任をとることになります。と
ころが建築士の場合、なにかミスがあったとしても建築士が
責任をとることにはなっていません。そこまで権限を下ろし
ていないということもありますが、個人に責任をとらせるよ
うになっていない日本の社会状況もありますね。すべて監督
責任になっています。規制緩和といいながら、なにかと監督
責任が出てくるから、完全に規制をはずすわけにもいかな
いのです。アメリカのように個人の権限と責任がはっきりして
いるような状況ならば、チェックは必要ないのかもしれませんが。
ただしミスをするとうりセンスを取り上げられたりしま
す。ささいなミスで一生ライセンスが取れなくなったりした
ら、かわいそうですしね。悪意でやった場合は別ですよ。ま
た、個人の建築士がすべて倫理規定を守っているかどうかと
いうこともあります。

耳が痛いですね（笑い）。

● いろいろな施主がいろいろな要求をしてくるんですよ。そ

れが規制外のことだった場合、はっきりと断われればいいですよ。何とかやってくれと頼まれるとか、逆にこうすればうまくいくと施主をけしかけて違反をやっている建築士がいます。残念ながら、そういう部分でのレベルアップは規制緩和以前に必要なことだと思います。

木造住宅の場合など規制を緩和しているといっても、一方で設備士のチェックが必要になったり規制強化している部分もあるんです。過渡期なんでしょうね。権限の問題や倫理の問題がすべてクリアもしくは見通しのつく段階までは今のスタイルでいくしかないと思います。ただしこれは単体規定についてであって、集団規定はまた問題が違ってきますから個人にまかせるといわけにはいかないでしょう。いずれにしても単体規定についてはどこまでを建築主事が見るかの整理は進んで行くでしょう。

一方、建築基準法が最低の決まりであるにもかかわらず、これさえ守っていればすべてOKという「標準」になっています。たとえば手摺の高さは「110cm以上でかつ安全な高さ」と書いてあるのに、いつの間にか手摺の高さは110cmでいいと思われてしまっています。足場があったりして110cmだと危ないケースでも、110cmあるからいいんだと納得してしまっている。これはおかしいですよ。危ないものは危ないので、最低の基準がすべてではないのですから、レベルの高い建物をつくるというのが社会の風潮にならないと、なかなか規制緩和には踏み切れませんよね。たしかに無理な条文もあると思いますがね（笑）。それは整理をしていかなくてはなりません。

何が書いてあるのかまったく分からない書き方をしていますよね。

● ええ、二重否定していたり、「○○もしくは○○、もしくは○○・・・」と続いたり（笑）。しかしこれは正確に書いているからなんです。どこからどう読んでも穴がないような書き方をするとあのようにになってしまうんです。「常識的に考えて正しいもの」なんて書き方ではすまないですよ。しかも技術の法律ですからね、文章にしようとするとなんか文章にならざるを得ないんです。解説書のようにイラスト入りで説明すれば分かりやすくなりますが、それを文章だけで表現するのですから。

ただ、その建築基準法で飯を食べている立場からいいますと、基準法はよく考えられている法律ですよ。すみずみまできちんとできています。都市計画法なんかガタガタですよ。

基準法以外に政令などもありますよね。

● 基準法を見て、つぎは政令を見なくてはならない。いったい何ページに載っているんだ！となってしまう。それに加えて手のかかる設計が多いから（笑）。

本当は「安全にしる」といって設計者が安全だと思われるようにすればいいんですよ。そのかわり、事故があっても建築

主事ではなく設計者が全責任を負うわけです。規制緩和と責任の所在をはっきりさせるのとどちらが先かということではないでしょうか。

阪神大震災

建築業界全体がモラルをもってレベルを高めていくことが理想ですね。

メキシコ地震調査に行かれていらっしゃると思いますが、行政の立場から今回の阪神大震災についてどのようにお考えですか。

● 危機管理の問題など話したいことはたくさんあるのですが、行政の対応についていえば国も含めて最悪の対応だといえるでしょう。マニュアルをいくらつくっても駄目ですよ。神戸の場合、そのマニュアルもありませんでした。地震はこないところだなんて、誰がいついたんでしょう。地震がこないなどという情報はどこにもないので、行政は関西に地震がこないなどといっているはいけませんよ。行政は最悪のことを考えて対応していかなくてはならない。日本中で地震のないところなんかありませんから。そんな対応しかしていなかったし、開発も山を削って海を埋め立てるような開発しかしてこなかったでしょう。いままで既成市街地再開発をしたことがないから、今回もトンチンカンことをやっているんですよ。東京は震災、震災を経験していますからノウハウがあるんです。現在、東京都には区画整理事務所が3つ、再開発事務所がふたつあります。大事なのは危機管理ですが、それより大事なのはこのような災害の際にパニックを起こさずに冷静に対処することではないでしょうか。

新耐震の建物はほとんど無事だったようで建築学会は正しかったのでしょうか。新耐震の建物で亡くなった方は少なかったようです。しかし建築基準法の第1条に「建築とは・・・生命、健康、財産を守る」とあるんですよ。建築だって財産じゃないか、と考えると問題は残るかもしれませんね。

最後に同窓生の方たちに一言お願いします。

● 昔に比べると設計は設計、施工は施工というようにどんどん専門が分化しています。設計は施工を考えてはいけません。施工を一元的に見れる人がいないんですよ。コンクリートから鉄骨からすべてを把握している現場監督がいないんですよ。設計者にしてもそれがすべて分かっているわけではありません。そういった中でだれかが倫理に反することをしても見逃してしまうケースがあるんです。よりレベルの高いものをつくるためには、それぞれがお互いについての知識を深める必要があると思います。

ぜひ同窓会でそういったネットワークを作っていきたいと思います。今日は長時間にわたって興味深いお話をありがとうございました。

建築学科同窓会第29期総会開かれる。

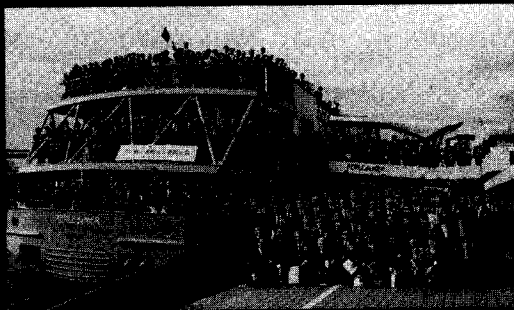
工学院大学建築学科同窓会第29期通常総会は、なかなか交流のない他学科の皆様との親睦をはかるため校友会総会と同日に開催することとなり、平成6年5月29日、工学院大学新宿校舎高層棟28階第4会議室において多数の同窓会会員が参加され開催されました。議事は第28期年度事業報告、収支決算の承認、第28期年度会計監査報告、第29期年度事業計画、収支予算の承認と滞りなく進められました。同窓会総会後昼食をはさんで、多くの皆さんが校友会総会に参加し、工学院大学学長大橋秀雄先生の記念講演「第三の波と求められる教育」を聞かれたうえ、懇親会に参加していただき他学科の同窓会の皆様と親睦も深められました。

工学院大学校友会全国大会・神戸

1995年10月29・30日に、第11回工学院大学校友会全国大会（兵庫県大会）が行われました。校友会兵庫県支部、大会実行委員長の岡本聖治支部長（当時）は昭和31年短大建築科卒の建築学科同窓会の先輩です。今回ぜひ大勢の建築学科の卒業生の皆様にお出でいただきたいとの思いがけない、他学科の約2倍の方が全国大会に参加されました。大会の会場となりましたメリケンパークの神戸海洋博物館ホールでは、北郷理事長、大橋学長をはじめ多数のご来賓の先生方、卒業生の皆様、そのご家族の皆様により盛大に大会が開催されました。その後行われた講演会に引き続き、客船ハルメタル号をチャーターして、紅葉する六甲の連なりを背に、自然がつくり出した独特の地形を持つ街並みの神戸市や、世界最長の明石海峡大橋を眺めながらの船上ハーティーが行われ、ご夫妻で参加された方々にも大満足の大会となりました。

出席者数222名、内訳は、機械工学科同窓会28名、化学科38名、電気学科31名、建築学科70名、高校7名、専門学校19名、その他29名でした。

翌日、建築学科同窓会では、参加者30名でレンゾ・ヒアノ設計の関西新空港旅客ターミナルビルと、FLライト設計の山邑郎の見学会を行いました。関西新空港は海上につくられた日本初の24時間体制国際空港であり、山邑郎はライトが日本で設計した数少ない建築作品のひとつです。山邑郎では南迫先生に建物の詳細な説明をしていただき、当時の新建築の記事も配られ参加した方にとって有意義な見学会となりました。



建築学科同窓会臨時総会・懇親会がアトリウムにて盛況に開催



建築学科同窓会1994年度臨時総会・懇親会が12月3日土曜日に開催された。これは昨年お集まりいただきました皆様から、6月には時間的に中途半端で集まりにくいとの意見が多かため、よりいっそうの皆様の出席により1階のアトリウムで盛大に行えるようにと役員、運営委員で検討を重ねました。例年この時期には多くの研究室がOB会を開催しており、一番要望の多かった12月第1土曜日の開催となりました。当日、臨時総会において建築学科同窓会役員の変更および校友会評議委員の改正が承認されました。引き続き舞台村をテーマに研究室ごとに出店参加していただき、多数の学生の皆様の協力により楽しく開催することができました。またゲームやハンドによる生演本や同窓会会員や在学生のコンへの受賞作品の展示も同時に行われ、招待者27名・同窓会会員163名・学生70名とかつてない盛りあかりを見せ、OBと在学生の親睦も図られました。

■御招待者出席者名 順不同 合計27名

北郷理事長 南雲校友会会長 米沢機械科同窓会長 間宮化学科同窓会長 吉岡校友会事務局長 波多江健郎 南迫哲也 望月大介 谷口宗彦 山崎弘 初田亨 萩原正三 安原治機 東正則 木村幸弘 遠藤和義 難波蓮太郎 吉田伸郎 正木三省 広沢雅也 望月洵 倉持道夫 近藤龍哉 中島康孝 水野宏道 足立哲夫 則田将了

建築学科同窓会役員改正

平成6年12月3日の臨時総会におきまして同窓会役員および校友会評議委員が下記のように承認されました。

会長：高木雅行

監査：倉持道夫

副会長：宮崎勝弘／高信碩文／谷口宗彦

会計：南雲正博／岩田俊二

会計補佐：藤井陽子（院生）／柴田卓次／武部克洋（院生）

幹事：亀山幸生／野牧英一郎（院生）／西尾順文／佐藤保広／
静賀正樹／大野寛

校友会評議委員

校友会副会長：高木雅行

常任理事：谷口宗彦

理事：宮崎勝弘／岩田俊二／柴田卓次／亀山幸生／
西尾順文／笹原克

評議委員：神前健一（昭和34年卒）／望月大介（平岡研究室）／
安原治機（波多江研究室）／中尾裕（安原研究室）／
初田亨（武藤研究室）／前田尚高（東研究室）／
戸沢正法（武藤研究室）／赤池正幸（正木研究室）／
田野辺幸祐（山下研究室）／桐英夫（十代田研究室）／
牛島明（南迫研究室）／小野里恵一（望月洵研究室）／
秋山寛（望月大研究室）／田畑健一（宮沢研究室）／
静賀正樹（望月大研究室）／飯島敏夫（今泉研究室）／
武田昌宏（谷口研究室）／小野正（難波研究室）／
南雲正博（谷口研究室）／小林信男（吉田研究室）／
村山浩一（大庭研究室）／桜田滋（中島康研究室）／
瀬戸信幸（中嶋泰研究室）／竹村明洋（大橋研究室）／
中嶋耕（山崎研究室）／高信碩文（水野研究室）／
佐々木秀史（初田研究室）／金澤由紀子（水野研究室）／
坂上みづ子（萩原研究室）／石田健一（宇田川研究室）／
東隆夫（宮城研究室）／佐藤保広（足立研究室）

・校友会評議委員について一部変更がありましたので報告いたします。

同窓会準会員への援助

昨年度より在校生（本学部生および大学院生）を対象にコンクール等への参加を促し、デザイン活動等を活性化させる目的で、設計および論文等のコンクール活動への援助として1課題あたり1万円の材料費を援助しています。応募された作品は同窓会講演会・懇親会等での作品展に出品いたしました。昨年度は3月31日現在、60名が各コンクールに応募し、多数の学生が入賞しました。資金については毎年同窓会より予算計上とともに同窓会会員の方々にも援助活動にご賛同いただき賛助金をお願いいたしたく、よろしくご協力願います。

1.入賞者

- 日知エヌ建築設計競技（静岡県、在学）3等
北川日生（大学院1年）／井出邦治（大学院1年）／宮田茂（大学院1年）
- 安全カッセル・ブロー・コンペ／安全カッセル活用アイデア・アワード
北川日生（大学院1年）
- 座間高山学生家具デザイン入賞（おもしろい家具、おもしろい家具）選考
北川日生（大学院1年）
- 光造形デザインコンペ（高層者のための創想的住居探求の在り方）入賞
北川日生（大学院1年）
- 田沢デザインコンペ'94
北川日生（大学院1年）
- S×E住宅設計コンペ（マリノック・リニア）の案件制作
宮本十（大学院1年）
- 新日本建築家協会東海支部建築設計競技（練瓦をテーマとした日本の外観をよめる競の部）銅賞
宮本十（大学院1年）／柳原寿志（大学院1年）
- 日本建築学会設計競技（21世紀の居住体）北陸支部支部入賞
宮本十（大学院1年）
- A・プランナブルワンコンテスト（優秀賞）
長崎誠（大学院2年）
- 建築探検デザインコンペ（ペン・シン・エ・ミ・ニ・ア）銭湯（学生賞）
岩田武弘（大学院1年）／関根（大学院1年）／正田ひろみ（大学院1年）
- 新日本建築学会設計競技21世紀の居住体（全国入賞佳作）
大塚寛（大学院1年）
- 建築探検デザインコンペ（ペン・シン・エ・ミ・ニ・ア）銭湯（学生賞）
宮田茂（大学院1年）／関根（大学院1年）／関根（大学院1年）／大森祐真美（八重宮高専）／安藤亜子
- 建築探検デザインコンペ（ペン・シン・エ・ミ・ニ・ア）銭湯（佳作）
山本芳朗（小野俊彦）／木下智（金澤由紀子）／内藤和昭（吉田尚史）／小川日香

建築学科教員の異動

●昇格

初田亨助教授（教授に昇格）／望月大介助教授（教授に昇格）／大塚毅講師（助教授に昇格）／遠藤和義講師（助教授に昇格）／大橋一正講師（助教授に昇格）

●新任（1995年4月1日付）

専任講師 野澤康（計画系）／専任講師 久田滌堂（計画系）／特別専任教授 石田頼房（計画系）／兼任講師 永嶋弘晃（計画系）／兼任講師 尾関勝之（計画系）／兼任講師 神尾武文（計画系）／兼任講師 小平恵一郎（計画系）／兼任講師 船越康弘（計画系）／兼任講師 山口浩司（計画系）／兼任講師 高田伸彦（共通）

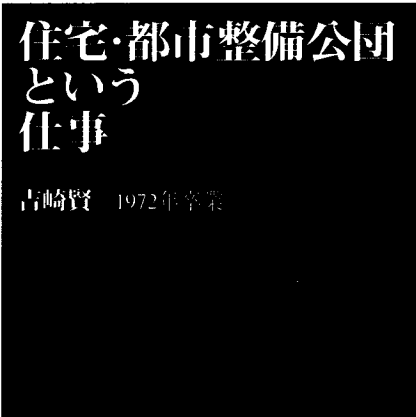
●退任（1995年3月31日付）

教授 十代田昭三（構造系）／兼任講師 池浩三（計画系）／兼任講師 内井乃生（計画系）／兼任講師 大田清一（計画系）／兼任講師 角田牧（計画系）／兼任講師 田中英介（計画系）（1994年8月31日）／兼任講師 萩原俊（計画系）／兼任講師 木下正道（生産系）

●主任教授：山下教授、廣澤教授 ●幹事：沢岡助教授、遠藤講師 ●八王子幹事：小嶋講師 ●学生主事：谷口助教授



同窓生からの便り



はじめに

昭和47年、山下研究室5回生卒業の吉崎と申します。卒業以来、住宅・都市整備公団に勤務し、現在、東京支社の赤羽再開発事務所で所長をしております。

今まで人並みに仕事をこなしてきたことは、大学在学中の先生がたの教えならびに学友とのつながりにあると思っております。この場をかりてお礼申し上げます。

私のおります住宅・都市整備公団は、昭和30年に設立された日本住宅公団が昭和56年に宅地開発公団と合併して設立された組織です。皆様にとって馴染みのある名前は公団住宅ではないかと思えます。

公団(略称:住都公団)は、住宅政策・宅地政策・都市政策それぞれの役割をもって総合的な居住環境づくりという観点から、住宅・宅地の供給と都市の整備との相互の関連に十分配慮しながら、総合的・一体的に事業を進めています。

最近、マスコミで住都公団の批判が多く、行政改革・民間圧迫など理由がありますが、技術者集団としての公団の社会的役割は大きいものがあると思っております。

いままでの仕事について

研究室がデザイン系だったこともあり、就職が公団に決まったときに周囲からは「公団に行って何をやるんだ」とよくいわ

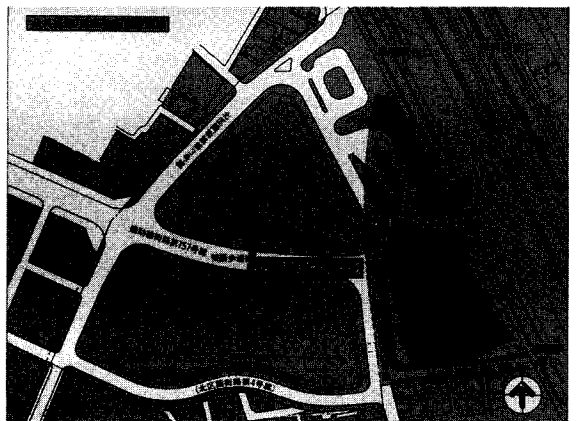
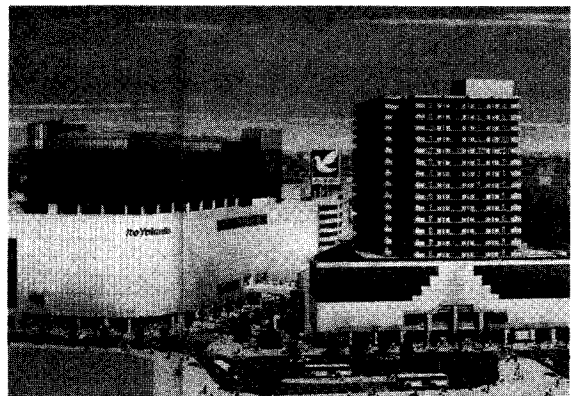
れました。聞かれる本人も、「何をやるのかなー」と答えていましたが、当時は大規模な団地の設計関係に関われたらいいなあと漠然と考えていました。

公団入社後は住宅団地の設計(主に配置設計)や計画の仕事に関わり、ここ10年以上は、街づくり・再開発(公団では都市整備事業と呼んでいます)に携わっております。いま思うと、よい経験をさせていただいたと思っております。担当した事業としては、千葉県の村上団地(配置計画)や江戸川区の葛西クリーンタウン(地域全体の計画および住宅計画)、中央区のリバーシティ21(佃島地区の計画)、恵比寿ガーデンプレイス(住宅計画)などで、建物単体の設計というより、地域や地区全体の計画が多く、街づくりの観点から、都市、道路、公園、建物を総合的に考えたり諸々の要素を扱うので、私自身にとっては面白い仕事だと思います。

阪神大震災について

前置きがだいぶ長くなってしまいましたが、2月の上旬に1週間、阪神大震災の関係で集合住宅の応急危険度判定調査のお手伝いをしてきました。

テレビや新聞で見聞きしたことと現地を実際に歩いて感じた認識とは大きく異なるものでした。本当に、悲惨な状況で言葉にいいあらわすことができないほどでした。街づくり・再



開発に携わる者として一日も早い復興を祈らずにはいられません。一方、歴史もあり権利関係が複雑で利害関係者が多数であることを考慮すると、実務レベルでは大変な困難が予想されます。市民、行政、関係者が一体となって進めるような復興計画が策定されなければならないと思います。

現在の仕事について

私が所属している赤羽再開発事務所は、京浜東北線赤羽駅西口地区で北区からの要請により、公団施行の再開発事業を行なっております。名称は「赤羽駅西口地区第一種市街地再開発事業（第II期）」で都市再開発法に基づく事業です。地区面積は約3.4haで2段階で事業が行なわれ、第I期事業（0.8ha）はアビレ・赤羽アボードIの名称で昭和61年3月に完成し、地域に親しまれています。現在、第II期事業が進行中で、今年の11月オープンを目指して頑張っています。

事業の目的は、公共施設が未整備で老朽建物が多く、商業が沈滞傾向にあるために、1) 駅前広場や都市計画道路などの公共施設を整備し（0.6haから1.7haに）、2) 商業を活性化し（大型店舗の誘致）、3) 広域コミュニティ核を形成し、4) 住環境の整備と公的住宅の供給を行なう（341戸）ものです。容積率は100%から720%に高度利用されます。

再開発は、関係権利者の合意形成に多くの労力と時間を要しますが、当地区の権利者数は、第I期事業が100名で第II期事業は1,769名（うち地上権者1,410名、実質359名）と多く、公団事務所が現地に開設されてから今までに18年が経過しています。所長は私で7代目になります。

私は何をやっているのかですが、当再開発事務所はこの事業の全体コントロールを行なっています。内容は、設計・現場監理は別の部門が行ない、事業計画の作成・実施、資金計画の管理、補助金関係、商業計画などでそれに関わる権利者や関係機関との協議・調整を行なうためソフト・ハードの両面にわたります。当事務所の公団職員が少ないこともあり、コンサルタントなどに業務の一部を委託しながら一緒になって事業を進めています。ここで行なっている仕事を分かりやすく説明するのは難しいのですが、平成4年に制度ができた「再開発プランナー」の業務プラスαで、私も発足時に取得しました。

最後に、赤羽においでの際は当事務所にお立ち寄りください。また街づくりに興味にある在学生の方々、住都公団で仕事をやってみるのも面白いと思いますがいかがですか。

同窓生からの便り

2足の わらじ

尾関勝之



現在、大手ゼネコン設計部に籍を置き、大組織の一員としてものづくりに携わっている。一方、私の住まいである群馬県藤岡市、東京の大都会とは比べるべくもない、小さな町で女房が設計事務所を細々と営んでいる。

本業は従業員数12,000人、設計部員約1,200人規模の大組織。かたや最小限の事務所。このような両極端な設計組織を同時に経験することになってしまった。このスケールの違いが刺激を与えてくれ、けっこう楽しい有意義な生活を送っている。大組織にありがちな、自分の意見がどうしても反映しにくい。いらだちは、群馬へ帰って十分発揮できるチャンスがあり、おおいに気晴しとなって大組織へ元気に戻ることができ、けっこう有意義である。個人事務所への設計依頼は、その個人の能力なりセンスを見込んで発注してくる場合が多い。しかし大組織への仕事の依頼は、組織のもつ信頼感によって発注してくるわけで、けっして個人には発注していない。しかし施主は担当者に期待している。失望するような場合は、すぐに担当者の首が怪しくなる。組織の中の個人であるが、組織から逸脱しないで個性ある個人が望まれる。個人と組織のジレンマを感じ、組織でのものづくりに常に複雑さを感じてしまう。

大組織の中の個人、その個人の発想なりイメージをいかに実現するか。それは社内の説得にかかっている。時には施主の説得より社内の合意を得るほうが難しい場合もある。組織内

にはタテ、ヨコのいろいろなチェック機構があり、これをクリアしていかなければならない。いずれかの段階で上司の意向にのってしまい、業務担当のみを行っているとか、いろいろな人の意見を聞きすぎた結果、誰の案だか分からなくなってしまっている状況もよく見かける。さまざまなチェックを受けることは早期に問題を解決する点でよいが、必ずしもよりよい案になるものではない。これらの段階では個人の感性をどこまでも大切にすべきだと思っている。

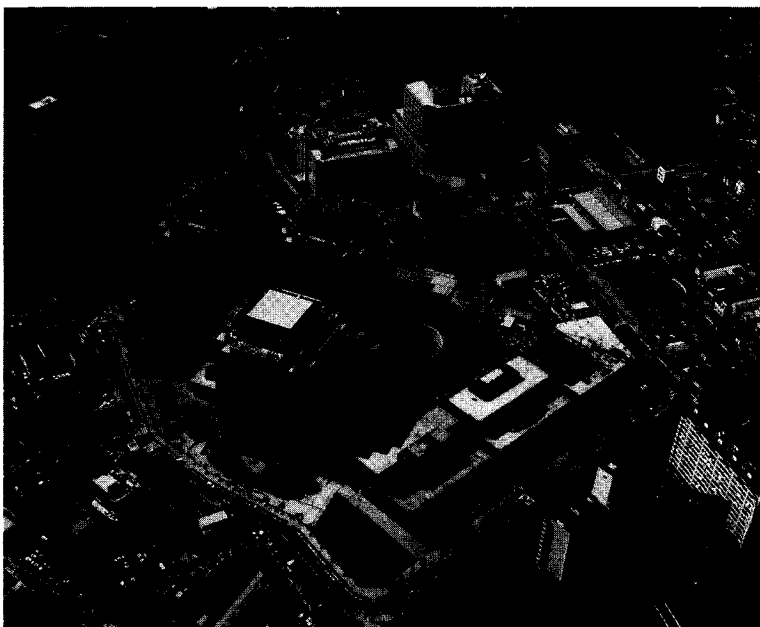
社内での同意を受けていよいよ発注者側へのプレゼンテーションが始まる。スケールの大きいプロジェクトによっては、発注者側の受け入れ体制も複雑である。特に事業内容も含めた大プロジェクトを大手ゼネコンで競うコンペ形式の場合、すべてがこのプレゼンテーションの印象にかかっている。最後はコスト競争で決まりそうな場合でも、設計主導で行なうプレゼンテーションの内容が提案の顔となって最前線に登場する。常に新しい方法、マルチメディアを導入したり、内容をいかに分かりやすく説明するかなど、その方法に最大の注意がはられる。受験生のごとく、プレゼンテーション会場を前日に視察し、社内の役員を含めたメンバーを発注者と想定してのリハーサルが何回となく繰り返し行なわれる。プレゼンが無事終了したときの解放感はまた格別である。皆で飲み交すビールがうまい。100億円規模のプロジェクトだと社内も注目している。わが社に決まれば大騒ぎ。しかし私の勝率はかなり低い。これはプレゼンやデザインの内容より、コスト勝負に負けたものだと慰めている。

個人事務所の場合、設計者が組みやすい構造設計者や設備設計者を指名し、信頼のおける施工業者に施工をまかせることになる。意匠設計者を頂点とした情報や意図の流れができあがる。しかしゼネコンは、ひとつの組織で企画・設計・施

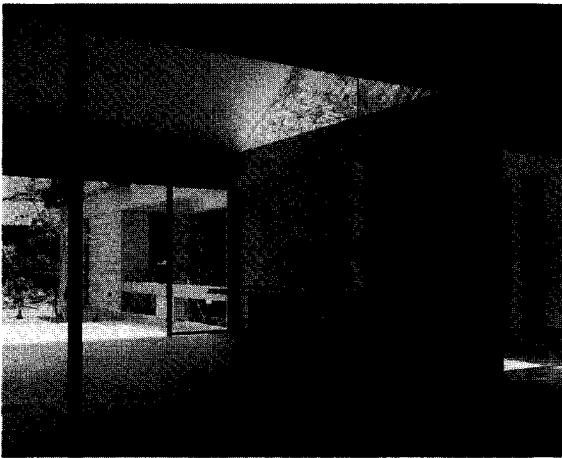
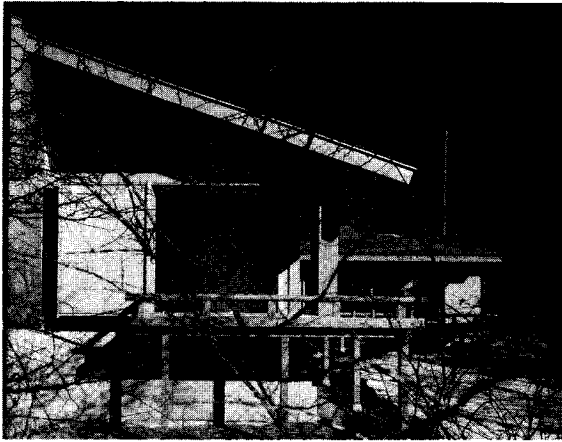
工・メンテナンス・リニューアルまでを行なっている。そしてそれらに所属する人びとは、同一職員であり立場上の優劣はない。仕事の流れからすれば、企画・設計を出発点とした順列を組まなければならないが、それら各担当者の立場は同列である。場合によっては、意匠より構造の担当のほうが先輩であったりする逆転したケースもよくある。したがって、構造・設備にしる理不尽と思うことは遠慮なく意匠設計に投げ返してくる。その結果、意匠・構造・設備が納得した設計内容となり、それは無難で何の問題も派生しないが、ひとつも面白くない内容となってしまう。逆に、構造や設備的に問題が派生しては企業イメージが悪くなると悟る者も出てきて、構造や設備の担当者から「もっと面白いものをつくれ」と励まされることもある。

ゼネコンの中ではこのところ、生産設計のあり方について注目されつつある。生産設計とは、設計図書で表現できない部分を、施工開始にあたって確認する意味で施工図を引き工種間の納まりなどのチェックを行なう業務で、設計者が設計終了後、現場が始まると同時にスタートする。しかしゼネコンでの設計施工の場合、計画内容に後戻りがないように設計の計画段階から、コスト的、工程的、工法的な面からの検討を加えたほうが、より合理的なものができるという発想のもと、計画段階から生産系の各部門のメンバーがプロジェクトに参加してくる。もちろん怪しげな納まりになると予想されるところは生産設計が早期に指摘する。このシステムはただ合理性を追及するばかりでなく、たとえば新しい空間づくりを目指した時に、それを支える技術が早期に組み込まれることになり、より確かなものにつながることをも期待している。

個人の事務所の場合、生産的なフォローはずっと後でよい。それほど新しい技術や工法を導入する内容やスケールではな



左：横浜・保土ヶ谷につくられた「横浜ビジネスパーク」。尾関氏が担当。次頁の住宅との規模を比べたし。



上：最近竣工した軽井沢の山荘。

下：群馬県藤岡市に建つ尾関氏の自邸。1989年末に竣工。

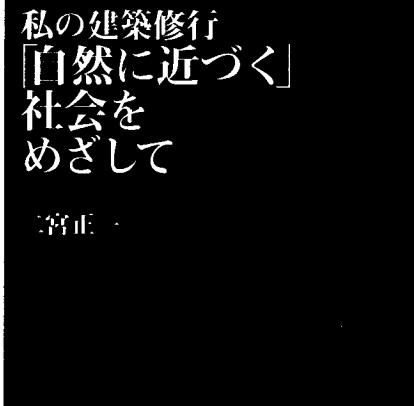
い場合が多いので、自分の身の回りの技術なりで対応十分と考えるからである。

このようなゼネコン設計部に約25年の間、籍を置いてきた。入社時、他の有名校に負けてならじと他人の寝る間も仕事に励んだ。出る杭は打たれるで、同僚からは批判もあったが、何とか評価を得ることができた。運がよかったと自分でも思うが、徐々にスケールの大きい仕事を担当することになった。素晴らしいデキでもないが、問題もなく竣工させることの繰り返しを上層部の安心感を呼ぶのか、ついには延24万㎡の仕事を担当することになってしまった。13haの白紙の敷地図を渡された時、本当にこんなものが実現するか信じ難い気分させられたが、ついに完成。ほとんど体力と精神力の勝負であったような気がする。

現在中間管理職。ものづくりもさることながら、マネジメントのほうに力を注ぐことを会社は望んでいる。不得意な大組織でのマネジメントより、ものづくりに専念したいものだと悩んでいる日々である。



同窓生からの便り

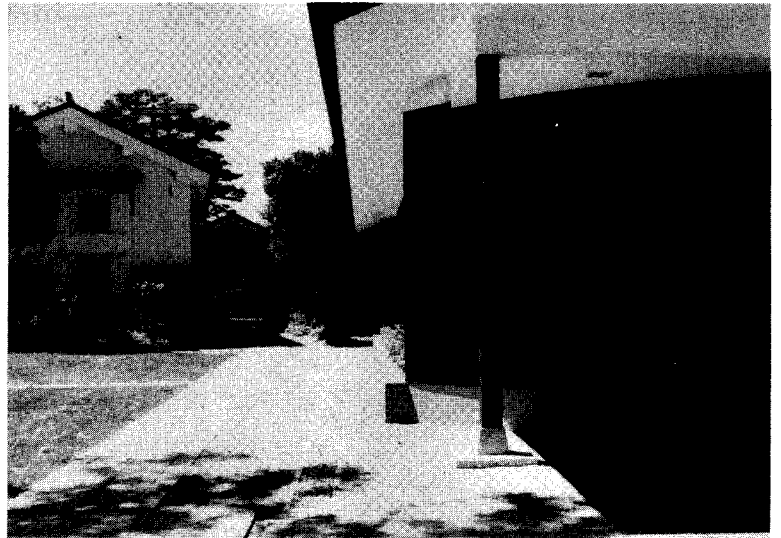


私の師は、山下司先生、天野太郎先生、吉村順三先生の3人である。特に山下先生には建築という世界に眼を広げていただいたことで今でも感謝している。米沢工高の建築科を卒業し上京した私は、自分の建築の知識のなさに失望し、奮起して翌年工学院大学の夜間部に通うことになった。今から25.6年も昔のことだが、つい昨日のことものようにも思える。当時、工学院には新進気鋭の若い先生方の熱気があふれていた。アメリカ帰りの山下先生のポール・ルドルフ論、北欧帰りの武藤章先生のアルヴァ・アアルト論、波多江健郎先生の建築概論など、学食での夕食もそこそこに先生方の講義を、眼を輝かせて聴いたものだ。それだけ講義も面白かったし、また先生方も夜の学生のほうが熱心に聴くのでつい熱が入るんだよ、と話していたのを思い出す。次第に私は建築の世界にのめり込み、昼は山下先生の事務所などでアルバイトし、夜は大学へと、睡眠時間を除くとほとんど建築の世界にどっぷりつかった毎日だったように記憶している。ちょうどその頃、ポール・ルドルフが名古屋に大栄ビルを設計することになり、私もルドルフの自筆のスケッチを実施図面に直す仕事を手伝わせてもらったりした。昼夜にわたる工学院での4年間は私の土台を築いてくれ、その基礎をつくっていただいたのが山下先生をはじめとする先生方であると思っている。

そうこうしているうち、卒業の時期になったが、おりしも学園紛争で卒業式の日程が決まらない。就職もままならず、ア



上：二宮氏の本「自然に近づく」社会」。
右：1993年東北建築賞受賞の「やませ蔵」。



アルバイトをしながら大学院に進むことに決めた。学費も自費で捻出しなければならなかった私にとって国立の大学院は魅力だった。東京芸大の試験は9月で、心意気を示そうと受験番号1番をとったのはよかったが、面接なども1番初めて、てっきりひとりかふたりの先生との面接と思って部屋に入ったら、なんと建築科のスタッフ全員がそろっており、面喰らったりした。山本学治先生の出題した建築史では、波多江先生とのツアーで見て回った西欧の歴史的な建築の勉強がおおいに役立った。2日にわたっての設計の出題には、日頃の鍛練が役立ったようだ。

念願がかなって天野太郎研究室に入り、先生から直接建築の指導を受けた。フランク・ロイド・ライトに関することを質問すると、先生は当時少し不自由な動作になられていたが、鎌倉の自宅からわざわざ資料をもってきていただいたりもした。おりしもライトの自由学園明日館の実測が行われることになって、大学院生も参加することになった。私も半年間率先して関わって、実測から作図と貴重な体験をさせてもらった。ライトを勉強しているうち、A.レーモンドや吉村順三先生のことがわかった。また奨学金を受けたいと思って出かけたところ、吉村先生が審査員で面識を得ることができ、図面をもって事務所にお伺いをした。吉村事務所ではノルウェー大使館をはじめ、多くの貴重な仕事を体験することができた。青函焼きから打合せ、現場監理まで朝早くから終電の時間を見ながらの毎日だったが楽しく、後に独立する際、役に立つことばかりだった。

私は光栄にも素晴らしい3人の先生に学ぶことができたが、師に共通しているのは、ライトの建築の影響を受けていることであろうか。ライトは終生、自然を規範とした建築を目指したが、ライトにとっての自然とは自分自身のマインド(心・精神)をも含んでいたはずだ。すなわち、それは私の3人の師に受け継がれているように、自分自身のマインドにしたがって建築

をつくるということなのだ。

私も師のもとでの修行を終え、自分自身のマインドにしたがって東北の故郷に帰って建築をつくっていくことにした。故郷に建っている建物で私のマインドに訴えかけてくるのは「蔵」しかなかった。「蔵」は日本の特質である実用と美を兼ね備えた貴重な建物である。そこで「蔵」の調査や研究を始めることになった。それは後に蔵を美術館に再生・修景するという「やませ蔵」の仕事に結び付いた。ひとつひとつの蔵を少しずつ直していくという根気のいる仕事で全体の完成に3年ほどかかった。しかし、完成してみると何か神々しい出来映えになっているのではないか、この「やませ蔵」で初めて建築の賞をいただいたのはうれしい限りであった。

また、昨年末に私は『「自然に近づく」社会』という本をつかった。私が学生の頃より追いかけてきた環境問題に対する自分自身のまとめのような本である。建築をつくる状況は20数年前とはまったく違ってきており、個々の建築も地球環境という大きな枠の中で捉える時代となってきた。地球環境問題も、人びとのマインドの中に、まだ地球(私の本の中では、地球生命圏=ガイアと呼んでいる)はかけがえのないものだという意識のあるうちにあらゆる手立てを考えておかなければならない。私自身の地域での実践も織り混ぜながら、21世紀の環境をどのようにつくっていったらよいか、模索の書であり、先生方にお送りして読んでいただいた。吉村先生からは「興味深く、一気に読んだよ」というお手紙をいただき、工学院の谷口先生からは「同窓会誌にも紹介したら」との言葉に甘えて、工学院に端を発した私の歩みとともに掲載していただいた次第だ。

最後に、工学院も校舎が立派になり建築教育も充実してきていると思われるが、コンペや作品至上だけでなく、広い視野から建築を学べる環境づくりを推進していただければと願うばかりだ。



同窓生からの便り

昼間には いえない 話しを、 深夜考えた

大島正之

1979年度卒業 サカエ工務店勤務



石川県金沢市・・・兼六園・成巽閣・武家屋敷・金沢城石川門・その他市内を歩けば江戸時代の建物が数多く残っており、これもご存じのとおり、金沢は空襲にもあわず古い町並みが今でも多く残っている北陸の都市?であります。日本の中でも四季がわりとははっきりしており、夏は30度を超える日が数日続き、冬には積雪が数十センチ。車で1時間も走れば夏は海水浴、冬にはスキー、また春には兼六園でのお花見、秋には近郊での紅葉狩り、当然、広い芝生製グラウンドでの芝刈などは20分も車で走ればチェックイン可能である。

この金沢で、今、私は施工店としてその業務を主に、設計業務を従に行っている。施工店業務では工学院大学山下研究室卒業の私といたしまして、完全に施工店中心の考えで建築物をつくる事ができず、設計事務所からいただいた設計図書にしたがい見積り・施工すればよいものを、設計図を見ては、おいおい建築するのはこんなものなの?これでいいの?などと余計なことを考え、施工中には、少々見積り金額よりは増額になるけれど、こうすればもっとこの建物がよくなると思えば余計な仕様変更とは思いつつ設計事務所に提案し、その結果増額なしで工事を進め、納まりのつかないところを相談に行けば、「適当にうまいこと納めてください」の一言で片付けられてしまう。この一言のために何日ない頭をひねって過ごさなければならないことか。特に今、厄介な素材が「魔法の?」コーキングである。最後はこの製品で納めてしまおうとする

方が非常に多いような気がします。通常この製品は皆さんもよくご存じの通り、補助的なものとして考え、これだけで防水が十分なわけではない、でも使うんですよこれが。後のメンテナンスはどうするんですか。漏水した場合、あちらさんはコーキングの施工が悪いといってくるに決まっているんですから。またある物件では玄関の吹抜けに大きなFIXのガラスがある住宅を施工した。工事も無事完成し、お客様に引き渡しをした年の暮も押し迫ったある日、突然施主の方から電話がありちょっと家のほうに来てほしいとのこと。何かかと思ひ急いで行ってみれば、「この窓掃除して」と、指差すほうを見れば例のガラスである。「私が悪いのではない、設計事務所を呼べ」と心の中で叫びつつ、気持ちとはうらはらに「あの一すみませんが梯子と雑巾ありませんか」と口から出ているではありませんか。何と情けない。ガラスは掃除をしなければいけない、この事に気がつかない私が悪いのだと思いつつ、我慢して冷たい水で雑巾を洗っていると、当の責任者(私はそう思っている)の先生が来て「寒いのにご苦労様」。ななな、なにー!! 一言で終り? こんなものつくったのだけ? 一緒に手伝ってくれないの? この瞬間私は??? 男に変身してしまうのだ。

ええい、もう一言いわせてもらおうか。この『NICHE』を読ませていただいてこのような「同窓生からの便り」は今までになかったと(あれ一言までおかしくなってきたぞ)。このような話を書いてもいいものだろうか、たぶん悪ければ編集委員の方から、ピーという音が入るかそれとも書き直して下さいという事になるでしょうからこのまま書いてしまえ。そう、予算、よ・さ・ん。そんな話はよさんの予算、当然計画する時点で頭の片隅に、この3文字は「ねえねえ私のことも少々考えて」、と流し目をちらちら送っていることと思いますが、どうしても凶面を書いていると、「ええいうるさいこの桜吹雪が目に入らぬか!」状態に突入しているようで、この気持ちも私には分からないわけではない。当然、私も計画もするし凶面も書いていますので。ただ施工者として何日もかけて見積りをし、提出すると「おたくのは高いね、どーして」ときたもんだ。それを聞きたいのは私です。「お客様の予算はそんなにないよ」といわれ、この次に出てくる言葉がたぶんあれ、そろそろかなと思っていると、そら出た、「設計変更するからこの位で納まらない?」。それなら先にいってくださいよ。見積りしながらこちらから提案できることを考え、参考見積りとしていっしょに提出するのに。そうすれば話が早くすむのにと考えてしまうのだ。またこのような仕事にかぎって床柱は何々を使用してとか、ん百万円のシステムキッチン、ん百万円のユニットバス、風呂の中にテレビなんかいるの? といいたくなるものが入っている。もっと別のところにお金をかけて! 予算たっぷり、工期たっぷり、小言少々なんて施主であれば多少のいや多々の無理はいくらでも聞きますが。・・・どうもこのような話になると力が入ってしまい、支離滅裂な文

章になり今お読みの方には申し分けなく思っております。日頃の思いが爆発いたしたみたいで、いやはや、ただすべての方が今書かせていただいたような事はなく、極端な例を上げたにすぎません。とフォローを忘れずにっ！

以上2~3設計事務所とのやり取りを勝手に書かせてもらいましたが(実をいうともっと面白い話は尽きませんが、もしこの顔末記を連載でもしてくれという依頼がありましたらその場でもっと詳しく書かせていただきます), 別にすべての設計事務所の方がそうであるわけではなく、たまたま私が金沢に来て何年かの間設計事務所の方とおつきあいさせていただいた中で、施工者側からの勝手な思いと皆様は聞き流して、いや、読み流してください。ただ、いろいろな施工業者の方がいらっしゃいますが、常日頃から良い建築は施主、設計者、施工者この3者が一体となり協力し合わなければ出来ないという事を強く感じています。そのため施工業者である私は、この事に気をつけて今後とも努力を重ねていきたいと思っています。現在私は江戸後期から明治の初めに建てられたと思われる茅葺き民家の保存工事を行っており、いつの日か、調査が済みましたらご報告いたしたいと思います。新しい建築も大変に好きですが、たまには古きを尋ねて見るのもよろしいかと思えます。



上2点：現在、大島氏が手がけている茅葺き民家の復元・保存工事。

同窓生からの便り

『集落拡大と 集落基盤計画 (荻原正三監修 岩田俊二著)』を 出版しました

岩田俊二
1970年度卒業 工学院大学客員研究員



このたび見出しの本を出版しましたので、ひとりでも多くの方のお目にとまればと思いこの原稿を書かせていただきました。この本は筆者が平成4年12月に工学院大学から授与された学位論文をもとにしており、内容としては10余年の計画研究の成果をとりまとめたものです。筆者は東京・文京区の生まれですので、学生時代に研究室で調査に行った筑波周辺の農村を見るまで農村の実態はまったく知りませんでした。今はもう面影もありませんが鬱蒼とした筑波の平地林、桜川の土手の桜、一面の菜花畑などが心象風景として焼き付いています。余計なことかもしれませんが、ここでは皆様には馴染みの薄い農村計画の概要をお伝えすることで本の内容紹介に変えたいと思います。

農村計画の特徴を考えると次の5つが大きいと思われます。第1は経済計画が基盤になっていることです。この経済は国民の食料生産という観点からと農家単位の個別経営体としての2通りがあります。農業の構造政策は国全体の農業の発展を目的にしていますが、個別農家の経営とは相克する面も多く難しい課題となっています。第2は総合的な環境計画であるという点です。半自然的環境としての農地、自然的環境としての山林原野、人工的環境としての屋敷地や施設用地をすべて包含しているので、総合的に環境を把握し計画する必要があります。農村集落の主な環境要素は、屋敷地、農地(水田、畑、樹園地)、林地(山林、平地林)、緑地(屋敷林、生け垣、鎮守の

森など)、農業用排水路のネットワーク、道路(生活道、農道)のネットワーク、集落施設用地(生産、生活)、河川ため池などですが、環境要素のそれぞれに問題を抱えているのが現状です。第3は国土利用、国土保全と密接に関連していることです。国土面積のうち都市計画の市街化区域外は約96%ですが、その可住地域についてはおおむね集落の単位が網羅しています。集落における水、土地、施設の維持管理は農家を単位とした土地改良区や集落自治会が行っています。おおむね水系単位で集落が集合して大字(おおあざ)、旧村、市町村、郡を構成しています。したがって、たとえ単一の集落の計画であっても大きくは国土保全、国土利用の視点が欠かせません。第4は人口減少の定住対策の面があることです。現在は大都市圏への人口流出は減少しているようですが、県庁所在都市などへの人口流出は続いています。定住対策としては雇用などの経済的側面、生活環境などの空間的側面などから総合的に見る必要があります。第5は都市的土地利用の進出への対処です。日本の場合、社会の発展には適切な産業政策による開発も必要ですし、農村地域にとって都市的土地利用がすべて不都合とは限りませんので、農林業的土地利用との調整が重要となっています。

次に昭和以降の農村計画の流れについて見ます。昭和恐慌による農村の疲弊に対して昭和7年から農村漁村経済更正運動が行われ、生活改善関連の農村諸施設の整備が行われました。戦後になると食料増産と復員者の失業対策として緊急開拓事業が行われました。昭和27年に農地法が成立し、農地改革が行われましたが、これが現在の農村地域の土地問題や農業の構造政策の遠因となり、問題も残しています。食料増産の時代から農村の低生産性、貧困性からの脱却をめざす自立経済計画策定の時代への変化に伴って昭和31年から新農山漁村建設事業が行われましたが、生産基盤や経済施設の充実整備に重点がおかれ、遅れた社会関係の改善を図るなどの計画は除かれました。昭和32年から八郎潟干拓事業、八郎潟新農村計画が始まり昭和42年に第1次入植が実現しました。昭和36年に農業基本法が制定され、自立経営農家の育成と零細農家の他産業への転換を図る構造政策を進めました。昭和37年に第1次全国総合開発計画が策定され、新産業都市などの拠点開発が進みましたが、農村地域には顕著な対策が講じられませんでした。昭和43年の新都市計画法さらに昭和44年の農業振興地域の整備に関する法律の制定によって、農村地域の土地利用規制が明確になり、農村地域も土地利用計画の時代に入りました。昭和47年に農業基盤整備の根拠法である土地改良法の改正により限定つきながら非農用地を含めた総合的な基盤整備が可能となりました。平成3年に建設省と農林水産省の共管により集落地域整備法が成立し、農村地域でも都市計画の地区計画や土地区画整理事業の実施が可能となりました。

筆者が参加してきた主な調査計画は以上の農村計画の流れに沿ったものとなっています。昭和46年からの数年間は都市計

画学会集落計画委員会や日本建築学会農村計画委員会が参加して策定した八郎潟新農村の集落計画や農家住宅計画を検証する調査に参加しました。昭和46~7年には愛知県常滑市矢田地区の集落調査に参加しました。これは昭和47年の土地改良法の改正により生産基盤整備と一体に集落改造が可能となったことにあわせた調査でした。鶏舎などの密居集落内の生産施設を移転団地化し、その跡地などを利用して集落内に広場や道路を設置するなどの生活環境の改善を課題としていました。平成3年に静岡県掛川市滝の谷・長間地区の集落整備計画に参加しました。集落のアメニティの向上、定住のための住宅地整備、生産基盤整備が一体となった事業の基本計画でしたが、土地処分により事業費の一部をまかなうという農村では画期的な事業でした。平成5年には岐阜県八幡町の中山間集落について調査を行いました。中山間地域の特徴である人口減少、不作付地や耕作放棄地の増加などの対策を検討しましたが、あらためて問題の難しさと解決のための選択肢の少なさを実感しました。

さて、今回出版した本の内容は次のようなものです。農村集落は農家の分家や非農家の転入により拡大しつつありますが、江戸時代から明治期にかけて形成されたと考えられている集落構造は現在の拡大動向に対応できないものになっています。そこで集落基盤の計画的整備を行う必要がありますが、その計画のあり方については明確になっていませんのでこれを実証的に研究し、その結果をとりまとめました。拙い内容ですがご覧いただければ幸いです。本は財団法人農林統計協会から発売、定価2,200円です。

工学院大学建築学科同窓会誌『NICHE(ニッチ)』発刊のための編集・発送費および賛助金のお願い

ここ数年間お願いしてまいりました編集・発送費は、同窓会会員が増えているにもかかわらず、今年も大幅に落ち込みを見せております。皆様の編集・発送費はいまや『NICHE』の発行を続けるためには欠かせぬ財源になっております。発送を含めると、本会の予算の大半をこの事業に費やしていることとなりますが、収入源の大半が現役の学生の終身会費(1人10,000円)の納入に頼っている現在、増加の一途である会員数を考えますと、経費がまかなえない状況になっております。卒業された方々のための事業の大半がこの発刊です。なにとぞよろしくご協力のほど、お願い申し上げます。また、賛助金も在学生と同窓会会員との交流を深める目的の合同懇親会や学生活動の援助として特別講演会や準会員への援助等に必要な財源のひとつとなっております。あわせてご協力のほどお願い申し上げます。

これまでにご協力いただいた賛助金の額は下記の通りです。

1986年度 総額	702,000円	(351口 309人)	
1987年度 総額	712,000円	(356口 226人)	(NICHE12号P.34参照)
1988年度 総額	733,000円	(365.5口 261人)	(NICHE13号P.36参照)
1989年度 総額	1,059,000円	(529.5口 298人)	(NICHE14号P.34参照)
1990年度 総額	928,500円	(464.25口 268人)	(NICHE15号P.29参照)
1991年度 総額	987,000円	(493.5口 256人)	(NICHE16号P.32参照)
1992年度 総額	864,000円	(432口 264人)	(NICHE17号P.30参照)
1993年度 編集・発刊費	544,000円	(272口 270人)	
賛助金	598,000円	(299口 224人)	(NICHE18号P.34参照)
1994年度 編集・発刊費	554,000円	(277口 277人)	
賛助金	766,000円	(383口 242人)	(NICHE19号P.3434参照)

1994年版同窓会会員名簿の頒布について

1994年版同窓会会員名簿

同窓会会員頒布額	5,000円	(含送料)
会員外頒布額	30,000円	(含送料+協力費25,000円)

なお、送金は同封の同窓会宛振込用紙を利用し必ず表面に「名簿代5,000円」と記入して下さいようお願い申し上げます。この記入がないと、全額「会誌の編集・発送費」とみなされてしまいますので、必ずご記入下さいますようお願い申し上げます。

工学院大学校友会STECカード加入のお願い

校友会では、広く卒業生の皆様に「工学院大学校友会STECカード」の加入を呼びかけております。このカードは校友会が企画するもので、VISAかマスターが選べます。また、母校のマーク入りのカードを是非お使いいただくようお勧めいたします。

各種サービスとして

- 1) 住所変更の手続きがカード会社を通じて自動的に同窓会に連絡され「同窓会名簿」の変更や各種 郵送に生かされます。(同窓会誌『NICHE』の発送など、各種情報の正確な連絡)
- 2) カード利用代金の一部(約0.3%)が校友会に還元されます。これは、奨学金などに生かす計画です。
- 3) その他、会員が増えることでさまざまな特典が計画されています。

以上のメリットをご理解いただき、ぜひ工学院大学校友会STECカードにご加入ください。

お問い合わせ、入会申し込みは下記まで

工学院大学校友会事務局

〒160 東京都新宿区西新宿1-24-2 tel.(03)3342-2064

第28期(1993年)事業報告／一般会計報告／運用財産目録／財産運用報告
 35周年記念事業分運用財産目録
 第29期(1994年)事業計画(案)／一般会計予算(案)

第28期(1993年)事業報告

- | | |
|----------------------------|---------------|
| 1. 同窓会誌「ニッチ」18号発刊 | 4. 準会員への援助 |
| 2. 各クラス, 研究室OB会および厚生部会活動援助 | 5. 講演会懇親会等の開催 |
| 3. 名簿の編集, 発刊 | 6. その他 |

第28期(1993年)一般会計報告 (単位: 円)

予算		決算	
収入	支出	収入	支出
1) 前年度繰越金 2,340,792	1) 会誌発刊費 1,456,500 a) ニッチNo.16印刷費 1,176,500 b) 編集費 250,000 c) 雑費 30,000	1) 前年度繰越金 2,340,792	1) 会誌発刊費 1,303,588 a) ニッチNo.16印刷費 1,027,000 b) 編集費 250,000 c) 雑費 26,588
2) 会費 4,089,000	2) 各部会費 120,000 a) OB通信費 120,000	2) 会費 4,085,000	2) 各部会費 43,317 a) OB通信費 43,317
3) 総会発送援助費 761,260	3) 同窓会名簿発刊費 215,000 a) 印刷費 0 b) 整理費 120,000 c) 郵送料 45,000 d) 雑費 50,000	3) 総会発送援助費 723,000	3) 同窓会名簿発刊費 170,299 a) 印刷費 0 b) 整理費 120,000 c) 郵送料 27,000 d) 雑費 23,299
4) 雑収入 1,700,000 a) 同窓会名簿売上 500,000 b) ニッチ編集発送費 600,000 c) 賛助金 600,000	4) 総会費 3,115,650 a) 総会通知印刷費 511,900 b) 総会通知発送費 2,223,750 c) 懇親会費 500,000 d) 雑費 100,000	4) 雑収入 1,983,000 a) 同窓会名簿売上 370,000 b) ニッチ編集発送費 544,000 c) 賛助金 598,000 d) 総会懇親会費 471,000	4) 総会費 3,855,035 a) 総会通知印刷費 416,893 b) 総会通知発送費 2,140,682 c) 懇親会費 975,115 d) 雑費 122,345 e) 講演会費 200,000
5) 銀行利息 500,000	5) 本部費 90,000	5) 銀行利息 373,604 a) 普通口座 4,724 b) 積立口 368,880	5) 本部費 93,849
	6) 積立金 2,000,000		6) 積立金 0
	7) 予備費 2,173,902		7) 次年度繰越金 4,039,308
合計 9,391,052	合計 9,391,052	合計 9,505,396	合計 9,505,396

4,039,308 - 2,340,792 = 1,698,516 (増)

第28期(1993年)運用財産目録 (単位: 円)

第28期当初	第28期末
1) 三井貸付信託元金 9,500,000	1) 三井貸付信託元金 9,500,000
2) 三井貸付信託積立口 1,635,144	2) 三井貸付信託積立口 2,004,024
3) 第一勧銀普通口座 1,252,861	3) 第一勧銀普通口座 698,650
4) 第一勧銀定期口座 0	4) 第一勧銀定期口座 1,000,000
5) 郵便振替口座 14,700	5) 郵便振替口座 342,660
6) 現金 23,980	6) 現金 579,867
合計 12,426,685	合計 14,125,201

14,125,201 - 12,426,685 = 1,698,516 (増)

第28期（1993年）財産運用報告 （単位：円）

	収入	支出	備考
三井信託	0	0	
三井信託（積立口）	368,880	0	2,004,024-1,635,144=368,880
第一勧銀普通口座	0	554,211	698,650-1,252,861=-554,211
第一勧銀定期口座	1,000,000	0	
郵便振替口座	327,960	0	342,660-14,700=327,960
現金	555,887	0	579,867-23,980=555,887
合計	2,252,727	554,211	2,252,727-554,211=1,698,516 1,698,516（増）

※35周年記念事業分は建築学科一般会計とは別会計とし報告致します。

会計監査報告 平成6年4月27日

帳簿、領収書監査の結果、記載が正確であることを認めます。

建築学科同窓会監査委員 高信 頌文 印
倉持 道夫 印

35周年記念事業分運用財産目録 （単位：円）

1) 第一勧銀定期口座	11,605,526
合計	11,605,526

※建築学科創設35周年記念奨学金として運用予定。

第29期（1994年）事業計画

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. 同窓会誌「NICHE」第19号発刊 | 5. 講演会、懇親会の開催 |
| 2. 各クラス研究会OB会および厚生部会活動の援助 | 6. 校友会全国大会への参加及び見学会の開催 |
| 3. 名簿整理・発送 | 7. 準会員への援助（論文・コンペ作品への援助） |
| 4. 総会の開催 | 8. その他（特別講演会への援助） |

第29期（1994年）一般会計予算 （単位：円）

収入		支出	
1) 前年度繰越金	4,039,308	1) 会誌発刊費	1,400,000
		a) ニッチNo.17印刷費	1,000,000
		b) 編集費	300,000
		c) 雑費	100,000
2) 会費	4,610,000	2) 各部会費	60,000
		a) OB通信費	60,000
3) 総会発送援助費（校友会より）	914,331	3) 同窓会名簿整理費	1,966,000
		a) 印刷費	1,700,000
		b) 整理費	180,000
		c) 郵送料	36,000
		d) 雑費	50,000
4) 雑収入	1,600,000	4) 総会費	3,099,900
a) 同窓会名簿売上	400,000	a) 総会通知印刷費	650,000
b) ニッチ編集、発送費	600,000	b) 総会通知発送費	2,349,900
c) 賛助金	600,000	c) 雑費	100,000
5) 銀行利息	400,000	5) 講演会・懇親会費	2,161,700
		a) 案内印刷費	89,000
		b) 案内発送費	1,272,700
		c) 懇親会費	600,000
		d) 雑費	200,000
		6) 通信費	989,000
		（校友会全国大会および	
		同窓会主催見学会の連絡・通信費）	
		a) 案内印刷費	89,000
		b) 案内発送費	890,000
		c) 雑費	10,000
		7) 準会員への援助費	800,000
		8) 特別講演会等援助費	800,000
		9) 本部費	100,000
		10) 予備費	187,039
合計	11,563,639	合計	11,563,639

NICHE
vol. 19

工学院大学建築学科 同窓会誌 1995

